

## 『親愛なる愚か者へ』 - 梶伊助

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

## 1

この世の終わりを迎えたかのような静けさの中、遙か頭上に浮かぶ太陽だけが変わることなく輝きを放つ。

一歩踏み出すたびに、地面を覆う足首ほどの丈の草がくしゃっとつぶれる音を鳴らす。見渡すばかりの草原の上を野鳥が風を切って空を這う。こだまする鳥たちの鳴き声は草むらに隠れる小動物たちの意識を引き付けるくらいのもので、のどか長閑ともいえる光景に感興をそらせる者はいない。空を仰ぐレイは、見た目は十代後半の青年だが、本人の感覚ですでに何千年も生きていると感じるほどに乾いていた。

人の作り出したものが存在しない自然一色に染まった光景はある意味爽快だが、方向感覚を狂わす雄大な自然を歩いているため、気分もおかしくなりそうだった。

「ナツの故郷は海を越えたところにあるんだよな」

象牙色の布きれに身体を潜めたナツという少女は頭の布きれを小さく縦に揺らす。

「ソウ。ズット、ヒガシノ、ウミノ、チイサナシマ」

わずかに陽気さを滲ませた少女の声が聞こえる。たどたどしく話すナツの表情は全身を覆う布きれに隠れて窺えない。時折、隙間から頭をのぞかせたかと思うと、今度は包帯に隠れている。二人は出会って間もないが、ここ数日一緒にいるレイもナツの素顔を見たことはなかった。二人ともおよそ人が身に着けることを目的としていない布きれを纏っているが、身体だけを覆うレイに対し、ナツはその小さな身体を埋もれさせるように全身にかぶせている。そのためナツという少女の特徴は外見的には小柄な身体ということしかわからない。

「海を渡るっていっても、どうやって渡ってきたんだ」

ナツは昔、ここから遠く離れた孤島に住んでいた。だが外の世界に夢を馳せた少女は単身海を渡って今いる大陸までやってきたという。

「フネ、ツクッテ、コイデキタ」

少女のそらごと空言を笑うように風が地面の草を揺らす。

「……本当かよ」

「ホントウ。ワタシガ、ジブンデ、ツクッテ、コイデキタ」

ナツはせいぜい単語ごとにしか喋れないが、その一つ一つに少女の性格が現れたような力強さを帯びている。

一人で海を越えてきたのかと問うと、少女は布を横に振る。

「ソウナン、シタ。デモ、オオキナ、フネニ、ノセテクレタ」

なんだ、とレイは得心がいき微笑混じりに頷く。そんな態度を見て腹を立てたナツは自分の体勢が崩れるのもお構いなくおもむろにレイのすねを蹴った。ひ弱な蹴りだ。案の定その後には尻餅をついた。

「大丈夫か」

差し出した手を無視して自力で立ち上がる。レイは思わず苦笑をもらした。頬をなでるそよ風が小さな音を立てて草を揺らす。まるで、世界が平和そのものであるかのように。

歩きながらナツは途切れ途切れにだが懸命に話を続けた。偶然漁に出ていた船に拾われたナツはそのまま港まで送ってもらい、無事海を越えたそう。だがそれだけでは飽き足りず、好奇心旺盛な少女はその後も多くの街を見て回った。ナツが言うには、迷わないようにずっと西に進んできたのだという。そこで目にした機械に満ちた景色は、畑ばかりの島で育ったというナツにとって目新しいものばかりだったのだろう。機械とコンクリートに・・・あふれて・・・いた街は理想郷のように映っていたのかもしれない。もっとも、二人がいま歩いている草原にそんなごうしゃ豪華なものを見る影もない。

「でもお前は運がよかったよ、当時なら一步間違えれば戦争に巻き込まれていたかもしれない。そうでなくても、差別意識の強い排他的な地域だったらどうなっていたとか。中立国の平和な地域だったからよかったものの」

苦言をもらすレイの言葉をどこ吹く風に、ナツは先を歩く。その足取りは遅く、一歩一歩足を引きずるように進む。少女の数歩はレイの一步と変わらなかった。

「レイノ、クニ、センソウ、シテタ？」

「戦争はなかったけど、貧富の差が原因の差別はあったな」

文明がどれだけ発展しても人間の黒い感情にまみれた部分は消えなかった。より大きな発展を目指すほど便利にはなったが、私欲にまみれた本性はむしろ露見する一方だった。

巨大になった国をまかなうだけの資源が枯渇し始めた大国は、こぞって発展途上の国のそれを求めて戦争を始めた。資源の豊富な国は瞬く間に戦争の渦中に放り出された。そうでない小国も急騰した軍需産業によって異様な発展を見せたが、それがかえって貧富の差を広げ、それまでは沈静化していた民族意識にまで波及して差別を根付かせてしまった。戦争はあっという間に数百年前に起きた二度の大戦を上回るものになった。

どれだけ文明が発展しても、問題の本質である人間が変わらなければ同じだということ嫌というほどわからせてくれるまで、それほど時間はかからなかった。

今では、戦争はもう終わりを告げている。差別が横行することもない。その代わりに、戦争を起こした人間自体はそのほとんどが地球上から姿を消している。人間が何千万年かけて築いてきた文明も消失し、残されたのは地球が太古から備え、今もなお繁殖を続ける自然ばかりだ。長閑な緑に埋め尽くされた景色は少し前まで戦争があったことなど夢にも思わせない。

「そんなことよりも楽しい話をしようぜ。どうせならナツの故郷の話とか。学校や友達のこと、帰ったらしたいこととか」

重苦しい空気を入れ替えるように破顔する。

二人の旅の目的はナツの故郷に行くことだ。そのためにナツが来た道を辿っている。当面の目的は海岸沿いまでたどり着くことだ。港を出航する船もない以上、海を渡る手段はいまのところないが、それを考えるのはまず海までたどり着ければの話だ。

「シマ、チイサイカラ、コドモ、スクナカッタ。デモトモダチ、タクサン、イタシ、タノシカッタ」

「ならどうして無理して出てきたんだ」

「ドウシテモ、ミタカッタ、ウミノ、ムコウ」

半分わかったように頷くレイの足をナツが弱々しく小突く。今度はそっちの番だと言いたいらしい。だがレイは低いうなり声を上げるばかりだ。

「正直、あまり覚えてないんだ。国や戦争のことは覚えてるのに、自分の記憶は曖昧なんだ」

レイはうろん胡乱な記憶をしどろもどろ話した。時折酒を飲み交わすような友人がいたこと。戦争が始まって仕事が厳しくなったこと。記憶を手繰り寄せてみたが、話しているレイ本人がその記憶を自分のものとは思えなかった。

「先は長いだろうし、早く歩こう」

半ば自分をごまかすように足取りを速くする。だが数歩進んだところで後ろをとぼとぼ付いてくる足音が消えたことに気づく。

「ナツ！？」

突然倒れたナツの元へ、わずか数メートルの距離を息急き切らせて駆けた。全身を覆う布の下で小さな手が額を抑えた状態でうずくまっている。相変わらず布と包帯に隠れた顔から表情は窺えないがただ事でないのは明らかだ。

レイは布の下を覗き込むようにして声をかける。ナツは呟くように大丈夫と言うが、勝気な性格のため言葉の真偽は定かでない。レイは苦悶の表情でナツの身体に目を向ける。

布の陰に隠れた少女の顔と肢体の丁度左側が仄かに光を放っている。本来体を成す肉

があるはずの部分、そこには代わりに光の粒子が無数に集まっている。少しずつだがその光はナツの身体を侵食している。神秘的にも見えるかもしれないその姿は、呪い以外の何物でもない。

「大丈夫か？」

同じ言葉でもレイの語気は数分前の問いかけに比べて明らかに切迫していた。ナツは肩で息をしたまま座り込んでいる。

ナツの身体にふりかかる奇怪な現象は『環元』といわれている。身体を構成する肉や骨が文字通り光を放つ微細な粒子に変化し、徐々にその範囲を広げていく。環元の影響は見た目以外にも如実に表れている。頭部の環元は喋り方をたどたどしいものにし、足の環元は歩くことに支障をきたしている。今はまだ人の姿を留めているが、全身が微細な粒子に変化すれば、その時点で粒子が霧散して跡形もなく消える。そんなお伽噺のようなものが、ナツという少女がおかれた現実であり、彼女の寿命であった。

だがその奇病に見舞われたナツが特別というわけではない。特別というならばそれは五体満足なレイの方かもしれない。

この環元という現象があったからこそ、終わりの見えない戦争は容易く終結した。大陸全土のほぼすべての人類が還元に見舞われ、跡形もなく消し去られたからだった。環元は、病のように突然変異的に現れたものではない。その原因は、それこそお伽噺のような絵空事としか思えない存在によるものだ。

「その娘はまだ大丈夫」

草原を揺らす風がやみ、温和な静けさが矢庭に糸を張ったように緊張する。背中越しに聞こえた声の主は、目の前でうずくまるナツでもなければもちろんレイのものでもない。冷淡な響きが背筋を震わせる女の声だ。振り返ると人の姿があった。レイよりも頭一つ小さく、亜麻色の髪を短く切りそろえた少女だった。背丈でいえば丁度ナツと同じくらいだ。少女のそうぼう双眸には海のような青が宿り、軽装とその幼さを残す容姿からは活発な性格が連想される。だがそれらすべてに反して、彼女はこの世のすべてを見てきたかのように達観した雰囲気漂わせている。レイは出し抜けに現れた少女に懐疑の眼差しを向ける。

「今、どこから……」

「ああ、そうね。ならこうすればわかるかしら」

わずかの間思案してから少女は右腕をレイの眼前にかざす。そして、その腕は突如煌びやかな光を放った。少女の腕は質量を失ったように無数の粒子に変わる。人が作り出したものとは明らかに違うその輝きは、ナツの身体が放つ光によく似ている。

その光景を目にしたレイが息をのみ、少女の正体を口にする。

「……せいれい生霊」

呟きとともに表情に険しさが増す。腹の底から憎しみや怒りが沸々と湧き上がる。無数の粒子に変化した腕が再び少女の華奢な細腕に戻る。生霊と呼ばれた少女は呼びかけには反応せずナツの隣にしゃがむ。

「まだ左の手足と頭が少し浸食されているだけだから、今のはただの発作みたいなものね」

幼い容姿とは程遠いひどく乾いた声がもれる。

「生霊がこんなところで何してるんだ。この辺りにはもう街も人もろくに残っていないだろ」

声が怒気を孕む。対して少女の姿をした生霊は静かに頷いて無機質な表情を崩さない。彼女、生霊という生命体にはそもそも感情という機能は働いていない。

「でもあなたたちは残っている。今はそれが重要なの」

「……生き残った俺たちを消すためか」

敵意を込めた鋭い眼差しが少女を射る。その目を、少女は憐れむように見据えた。

「人類の掃除はすでに九割方終えている。わざわざたった二人を消しているほどこちら暇ではないの」

少女は淡白な口調のまま残酷に現実を告げる。外見はただの少女にしか見えない

が、彼女の正体は『生霊』というまったく別個の生命体であり、今現在まさに人類を滅ぼしている存在だ。

生霊という存在は何かの動物が進化して現れたわけではなく、人間のような生殖機能によって数を増やしているわけでもない。言うなれば、彼らは生物というよりも、地球という一つの生命体が生み出したシステムに近い。

生霊は、地球の環境が著しく危機に瀕した時、地球が備える防衛機能として姿をもって現れる。本来の姿は今やってみせたような光の粒子が無数に集まった球体のような形を成しているが、生霊はその姿を変え、地球に生まれたどんな生物の姿にも変化することができる。彼らは自分を生物の姿に変えて群れに溶け込み、しばらくは地球上で最も発展し、最も環境を害している生物の観察に徹する。そして彼ら——今における人類が進化に限界を迎え、地球の危機的状況を回避できないと判断されれば、生霊は地球を保護するために人類を滅ぼす。生霊はそれを掃除と呼び、彼らにしかできない環元という方法によって掃除を行う。

人間が消されたのは、資源が枯渇し始めた状況で、戦争で奪い合うことしかできなかったからだ。その時点で人類にはこれ以上の発展の余地はなく、掃除の対象として判断された。恐竜の絶滅もその一例だ。

「もう人間に求めるものはないはずだろ。俺たちを消すつもりもないなら、早く生まれ変わる準備を始めればいいじゃないか」

「けれどそう簡単な話でもないの。次の種に生まれ変わるにあたって一つ見定めなければいけないことがある」

生霊の瞳がレイを見据える。仮面のように揺らがなかった少女の表情がはじめて陰しさを帯びた。

生霊が最も発展していた生物を滅ぼせば生物の進化は途絶えてしまう。けれど生霊——生霊を生み出す地球はその事実をよしとしない。そのために生霊は環元を引き起こす以外にもいくつかの機能を備えている。その一つが、生霊自身が新種の個体へと生まれ変わることだ。

これは生霊が、人間や現存する生物の姿を真似るのとは違う。生霊は長い眠りを経ることで、現存する個体よりもさらに優れた生命体へ生まれ変わることができる。ただそのためには、他の生物が経験し、積み重ねてきた文明の知識が必要となる。人間が抗原に反応して抗体を作るように、生霊は地球上の生物の進化の歴史を観察してしゅうしゅう蒐集した知識を参考にし、可能な限り理想的な身体構造を持つ新たな個体に生まれ変わる。魚が陸に上がるために呼吸器を調整していったのも、より高度な知能のために脳を大きく複雑化させていったのも生霊のこの生まれ変わりが繰り返された結果だった。こうしてこれからも、人間の歴史を活かしてより高度な生物が生まれる。

目の前の生霊は、そのためにまだ観察を必要とする概念があると言った。

「感情。人間が心と呼び、生霊にはないもの。これまでの他のどの生物をとっても人間ほど強くは見られなかったその作用は、人類が飛躍的な進化を可能にした要因にもなっている。けれどそれは利己的にも非合理にもなり戦争や差別を引き起こした」

生霊の眼差しに鋭さが増す。

「感情という作用は人類も解明しきれなかった。その感情という脳の働きを次の種に残すべきか否か判断する。そのために多くの生霊はそれを見定めるために観察を続けている」

「世界をこんなことにしてからか」

「こんなことになっているからこそのことよ。危機的状況下の方が、人と人との繋がりにより顕著な感情の作用が見られると考えられているわ」

それに、と視線の矛先をナツに向ける。

「環元の進行には多少の差はあるけれど、その娘ほど安定している例はめったにいない」

彼らは今現在人類を滅ぼしている。そんなことは普通に考えれば不可能だが、彼らに人間の常識は当てはまらない。『環元』という現象は、生霊が生物の掃除を行う手段だ。

環元は、彼らの身体を構成する光の粒子に触れると発症する。彼らはその粒子を振りまけば、物質は環元を引き起こして瞬く間に消える。その対象は生き物だけにとどまらず、人が作り出した機械の類や自然の木々にも効果を及ぼす。そうして世界から人類の文明そのものが姿をなくしつつある。

たったそれだけのことで人類の九割以上が滅んだ。なにより彼らを殺す手段は人間にはなく、あったとしても人間は生霊なんて存在を感知する前にすでに消されている。環元にかかれば普通二、三日を待たずして全身が光子になって消える。だがナツはすでに一週間もの間生き続けているうえ、環元の進行は著しく遅かった。

「彼女が今も生きていられるのは、単純に運ということもあるだろうけど、彼女の故郷に帰りたいという意志の強さに結びついていると考えられている。いずれにせよ、感情という機能は今、生霊にとって最も優先すべき懸念事項なの。生き残ったあなたたちはその観察の対象としてはうってつけだった」

言い終えると生霊はきびす踵を返し、際限なく広がる大地に向かって指をさす。

「この先にしばらく歩けば森がある。そこをまっすぐ抜ければ海に近づける」

生霊の行動にレイは首を傾げずにはいられなかった。本来生霊は、人に成りすまして接触を図ることはあっても、正体を隠さずに接触してくることはない。この生霊の行動は、彼らの行動原理とは正反対のものだ。

「どうしてそんなことを」

「簡単にあきらめてもらってはこちらの目的も果たせない」

そう告げた後、聞こえるかどうかというか細い声で言い申す。

「強い感情は人を狂わせてしまう。人だけでなく――」

生霊は言葉を切る。噛みしめるように脛を閉じる面持ちは、感情のない生霊の作り物には見えなかった。

一筋の雲の下を名前もわからない鳥が飛び去って行く。レイは何かを口にしようとしたが、鳥のさえずりにかき消されるように言葉は泡になって消える。言いようのないやるせなさだけがレイの胸中に波紋を残していた。

生霊の姿が足元から徐々に光へと変わり、やがて球体のようになる。姿を変えた生霊は孢子のように空に消えた。二人の旅を観察するために、生霊はこれからもどこかに潜んでいるのだろう。

また吹き始めた風に草原が波打つ。光の軌跡を神妙に仰ぎ見るレイが纏った布をナツが引っ張る。

「ああ悪い。もう大丈夫か」

「アノ……ヒト……」

「あいつは人じゃない。お前をそんな身体にした奴らだ」

レイは無意識に拳を作る。ナツは何かを言いかけたように息をもらしたが、結局レイの手を取って立ち上がり、またゆっくりと歩き始めた。

この無限に広がるように思える緑には、レイとナツ以外の人間はほとんどいないのだろう。レイとナツが旅を始めてから、二人は自分たち以外の人間を目にすることも、どこかの街に入ることもできなかった。当然、レイという少年が少し前まで住んでいた街もすでに存在しない。人が抛り所とした場所は少なくともこの大陸からは消え去った。実際のところ、ナツの故郷が今でも残っているという保証はなかった。

あるかどうかもわからない場所を目指し、どれだけ残されているのかもわからない時間の中でただひたすらに、二人は東に向かって旅をし続けた。

春の清々しい風が耳をすり抜けるように吹き抜ける。しゅくぜん肅然たる自然の中では些細な風の音や動物の命の脈動さえ聞き逃すことがない。その事実が、少なくとも人間がいた世界の終わりを実感させた。

——生霊は、地球という一つの生命体が生存本能として生み出した存在である。地球環境が危機に瀕した時、生存本能が顕現したかたちとなって無数に生み出される。元々は光の粒子が集まった球体の形を成しているが、その姿は自在であり、認識していればどんな生物に擬態することも可能だ。

生霊の目的は地球の保護、及び地球の生態系の発展だ。

生霊は地球を危機的状況に招いた種、つまり最も発達し支配力を持った生物を監視、また観察することで知識を蒐集する。そして、生霊にこれ以上の発展がなくいたずらに地球を害するだけだと判断された生物は、生霊に環元という手段をもって消去される。

環元とは物質を、生霊を構成するような粒子に戻し、資源や成分をかつての状態に戻すことを意味する。粒子には生物の記憶が刻まれており、その粒子に触れることで生霊は莫大な記憶や記録を蒐集する。また生物の脳に触れば、環元を起こさずにそのまま記憶を奪うことも可能である。

害となる生物の消去を終えた後、生霊は集めた記憶や記録を基にして新種の個体へと生まれ変わることができる。生霊を形作る粒子は、長い眠りを経ることで他の生物と遜色のない血肉を構成するようになる。血肉を持った身体を形成する際、生霊は既存の生物よりもさらに高度な個体へと生まれ変わろうとする。集めた記憶や記録を基にするというのは、地球上の生物が経験してきた歴史から、次にどのような機能を持った個体へ生まれ変わるべきかを決定するということだ。

この生まれ変わりの機能は、地球にとって身体の一部ともいえる生態系をより高度なものにしようとする本能が働いているためである。人間も、猿という前身があり、その時点での知識を基に、生霊がより高度な個体に生まれ変わった結果として誕生した。

しかしだからといって、生霊が欠点のない理想的な機能を持った生物に生まれ変われるわけではない。

生霊は生物を観察し、集めた知識を基にして生まれ変わる。それはあくまで人間という存在が作り出した可能性を体現するのであって、空想の産物をそのまま生み出せるというわけではない。水中でしか生きられない生物が陸に上がろうとしたように、一つ一つの課題を順番に改善して進化していくに過ぎない。人間が鳥類のような翼を持っていないのも、人の身体で翼を持つのは現在の時点での知識では不可能だったからだ。それに加えて、生霊は必ずしも想定通りに生まれ変われるわけではなく、飛躍的な進化には何度も生まれ変わりを繰り返す必要がある。

生霊という存在は地球が生み出したシステムに過ぎない。生霊は一見そのままでも万能に思えるが、生まれた時から生霊としての使命を盲目的に果たすだけの彼らでは既存の生物以上の文明を築くことはできない。そのため生霊は新しい個体に生まれ変わる必要があり、その際に彼らは生霊としての記憶を失う。

生霊が行うのは前述のように、記憶や記録の蒐集、その際に環元をもたらし生物を消去すること、そして新たな個体に生まれ変わることだけである。愚直に与えられた使命だけを全うする彼らは争いを起こすこともなく、同族を殺すことなどは考え付きもしない。彼らに感情という機能は見られず、彼らが人間の姿を真似た時に見せる感情表現はあくまで人間を模倣したものに過ぎない。

生霊は己の使命を尊び、果てのない進化を繰り返し続ける。その進化が停止した時、地球という惑星での文明は終わりを迎えるとされる――

## 0

街を一望できる時計台の上からの景色は、夕陽によって一面を茜色に染め上げられている。等間隔に並ぶ街灯が明かりを灯し、夜に沈もうとする街並みを再び昼に巻き戻す。

「この景色もあと少しで見納めか」

時計台の――およそ人間が乗る場所とはいえない屋根の上に座る少年が足を投げ出している。

「まるで人間が感傷に浸っているようね」

足音もなく現れた少女が少年をやゆ擲する。亜麻色の髪を耳で切りそろえた少女は不安定な足場に立ったまま少年の一步後ろに並ぶ。

「まるでじゃなくて、人間ならそう言うだろうと考えただけだ」

街を眺める二人は幼さの残る容姿に反して表情の起伏に乏しい。それは彼らが人間ではないからだ。

二体の生霊は同じ地区の観察を担当している。こうして定期的に接触を図り、蒐集した記憶をやり取りしている。

少年の姿を真似た生霊は視界を街の遠方に移す。この国は戦争とは直接関係ないが、戦争がもたらした特需によって瞬く間に経済を活性化させた。

生霊はこの時計台からよく街を眺望していた。ここからの景色は華々しい発展を遂げた街並みと、その犠牲になった灰色の景色を観察するには絶好の場所だった。少年の生霊は一点だけ煙が立ち込める工場をぼんやりと眺める。瞳には、この生霊がしばしば観察対象としているレイという少年が工場で働く姿を映す。彼は貧困で学校を辞めざるを得なくなり、連日働き続けている。疲弊した面持ちから解放されるのは、せいぜい時折訪れる酒の席だけだろう。彼だけでなく工場で働く者のほとんどが同様の状態にある。

「彼らは、何のために生きているんだ」

呟く少年を、少女の生霊が信じられないものでも見るような眼差しで見る。

「何のために生きているか、そんなことに理由は必要ない。生物の生存本能がいちいちそんなことで揺らいでいては、一つの種は簡単に絶滅してしまう」

「それもそうだな」

反論の余地もなく少年の生霊は再び街をふかん俯瞰する。

## 2

一日かけて草原を歩いた先に、底の見えない暗闇が待ち構えている森の入り口が確かにあった。すでに陽が落ちてから時間が経過していた。漆黒のとぼり帳が下りた夜空には、星々がこれでもかというほどその存在を示す輝きを放っている。人間が空を汚していたころには見ることもなかった光景だ。

眼前には地面の草と比にならない大きさの樹木が無数に連なり、二度と抜け出せないと思わせるような常闇が構えている。すでに太陽の助力を得られる時間ではない。自然の巨大な迷路は、迷えばしばらく抜け出せない可能性もある。

レイは一度休憩をとろうかと提案したが、ナツは頭にかぶった布を揺らしてかぶりを振る。足取りが遅いことを気にしているナツは、レイが休むといっても先に行って待っているということは予想できていた。共に旅した数日でナツが勝気な性格だということは、ゆっくりとした語調でしか喋れなくとも理解できた。

環元に遭った人間は肉体的な疲れを感じず、そのため眠ることもない。表には出さなくとも、じっとしているのが恐いのだろう。なにしろナツはまだ年端もいかない少女だ。

仕方ない、と苦笑してレイも再び足を進める。

数分歩くとやはりというべきか、周囲は瞬く間に夜の闇に輪をかけた暗黒に包まれた。一面から漂う樹木の匂いが鼻腔をつく。切り裂くような夜風が頭上の木の葉を揺らしかさかさ音を立てる。わずかに期待していた星の明かりも幾重にも重なる樹木の天井に遮られてしまっている。それでも二人が不安定な足場に翻弄されることはなかった。

布地の下からあふれる微弱な光は、日中ならほとんど目立たないが夜になるとその存在を強調する。ナツにとって呪いの象徴であるその光が皮肉にも二人の助けとなっていた。

視界の端で蛇のような細長い影が姿を見せたが、二人の姿を確認するとすぐさま茂みの中に隠れた。樹海の中で鳴りを潜めているはずの動物たちが二人の前に現れないのも、ナツの姿が関係している。生霊と似た姿のナツを本能的に忌避しているのだ。おかげで猛獣に襲われる心配もない。それでも、できるならレイはその光には頼りたくはなかった。無理とわかっていて休むことを提案したのはそんな心情の表れだった。視界の問題は解決できたとしても、入り組んだ樹海を目的通りに抜けられるという確信はなかった。生霊はまっすぐに進めばいいと言うが、木々に遮られた道はまっすぐに進むことさえも難しい。懸念するレイとは裏腹に、ナツの足取りはいつも通りかんまん緩慢だが迷いが無い。低く垂れる枝をものともせずかいくぐる。珍しくレイが後を追うかたちになっていた。

「本当にこっちで大丈夫なのか？」

「マッスグ、イクダケ」

それはそうだが、と言葉を濁すレイを尻目にナツは足を止めない。

「コウイウトコ、ナレテル。ヨク、アソング」

ナツの故郷は小さな孤島、それもかなりの片田舎だという。似たような環境があったのだろう。

「友達はどうな奴だった？」

ん、とナツが素頓狂な声をもらす。何気なく聞いただけだったが、ナツは緩慢な足取りはそのままに低いうなり声を上げて真剣に考えていた。

「イライラスル、ヤツ」

えっ、と今度はレイが間抜けな声を出す。

「メンドクサイ、ムカツク、ハラガタツ」

何かを思い出すように続けるナツの口調は心なしか普段よりも速い。レイは思わず顔も名前も知らないナツの友人たちに同情してもういいからと止めていた。

「デモ、イッショニ、イテ、アキナイ」

ナツの言葉を皮切りにしたように、茂みが音を立てた。間違いなく何か潜んでいる。人を襲う獣の類であったとしても生霊に似たナツの姿を目にすれば避けていくはずだが、それでも二人は身をすくませて茂みから視線を外せなくなる。

「人の声がした気がしたんだが……」

木陰から現れたのは、タイトな軍服を着た長身の男だった。

男は片手にたいまつを携え、もう一方の手に水をくんだバケツを掲げている。人に成りすました生霊かと疑ったがその手荷物を見て警戒を解く。

「……………」

お互いがどうしたものかと沈黙する。男は獣のような鋭い目つきはそのままだが、口は上手い言葉を探すように何度か開閉を繰り返している。

「あんたたちも、帰る場所がなくなったのか」

男は探るように二人に声をかける。身なりや長身から見下ろされている感覚で錯覚していたが、まだ若さの残る青年のようだ。

渋々頷き返すと青年は背を向け、塞がっている両手の代わりに顎で方向を示す。

「この先に俺が使っている家がある。よければあんたたちも来るか？」

突然の誘いに二人は顔を見合わせる。青年は所在なく返答を待っている。

旅を始めて以来、人と会ったのはこれが初めてのことだった。

森の中腹の一際開けた場所に、家というよりは小屋に近い建物があつた。三角屋根の一隅に煙突が取り付けられている。そこが彼の今の家だという。建物の至る所に木の板が打ち付けてあり、長いこと雨や嵐に耐えてきたことが見て取れる。家の前には柵で仕切られた畑もあり、この場所が急ごしらえで設けられたものではないことを物語っていた。

青年が先導し、二人が落ち着きなくその後が続く。休んでいかないかという誘いを初めから休息をとるつもりだったレイは快く受け入れた。ナツは口を挟まなかった。他人の厚意を無下にすることをちゅうちょ躊躇したのか、声を出して異常を察知されるのを恐れたからなのかはわからない。幸い、青年は道中でナツの外見については気づいていたようだが、そのことや足取りが遅いことで表情を変えることはなかった。

木でできたテーブルや椅子といった家具は精巧ではないが、手製の温かみのようなものを感じさせる。室内を照らす暖炉がそんな趣を助長する。小国までが機械化された時代においてはお伽噺の舞台のようなものだった。

「お帰り。今日は遅かった……そっちの二人は？」

この家の住人は青年だけではなかった。暖炉の前に一人の女性が行んでいる。独特の模様が印象的なケープに身を包んでおり、柔和に微笑みかける表情は青年よりも幾分大人びている。

「さっきそこで会った。俺と同じ事情らしい」

ぼくとつ朴訥な青年の言葉を聞いて理解半分は頷き、突然来訪した二人を受け入れ



る笑みで迎えた。

二人は薦められるままに椅子に腰かける。青年も水の入ったバケツを部屋の片隅に置くと二人に向き合う位置に座る。

「この森には湖があるおかげで水には苦労しない。あとは野生の動物を獲ったり収穫できるかわからない野菜をあてにしたりでなんとかやっている」

先程とは打って変わり落ち着き払った声で説明する。暖炉の前にいた女性は木製の皿を片手に暖炉から何かを取り出している。

「あんたたちも食べるか？ さっき獲った蛇や蛙だが」

女性が持ってきた皿にはこんがり焼けた蛇や蛙がほとんど原型を残したまま串刺しになっている。

「こんなものでよければどうぞ食べて」

若干ひきつった笑みで応じる。食事の量は二人分にしたところでどう考えても少ない。貴重な食材をもらってしまうことに抵抗を禁じ得ない。だが、手を出しあぐねているレイを尻目にナツは串に刺さった蛙に手を伸ばしてそのまま口に運んだ。

「オイ……シイ」

女性と青年はそろって安堵したように頬を緩める。そんな光景を見ていると遠慮しているのはかえって失礼に思いレイも手を伸ばす。

環元している人間を動かすのは、生霊の言う本人の意志や感情の強さだ。食事の有無は生死には関係していないが、食べるという行為そのものが人にとっては大きな原動力にもなった。

「……いただきます」

その言葉を合図に青年と女性も食事を始める。青年と女性はラウルとアンナというそうだ。

それほど多くない食料を四人で分けたために食事はすぐに終わった。ラウルは咳払いをして本題を切り出す。

「やっぱりあんたらも、いきなり人も街もなくなって放浪していたのか」

「ええ。生霊に全部消されて、俺は運よく生き残ったけど……」

「生霊？」

生霊という単語に二人ともが虚を突かれたような表情をする。聞けば彼らはこの状況が生霊によってもたらされたということを知らなかった。

どこから話したのか頭を悩ませながら、レイは知っていることを包み隠さず教えた。二人ともしばらく啞然としたように押し黙り、目をしばたたいている。

「人間に未来はないから、人間を消して新しい生物に進化する……」

「とてもじゃないが信じられない話……と言いたいところだが、現実に街ごと人が消えてればそんな話でも疑う気もなくなる」

アンナは放心したように呟き、ラウルは神妙な面持ちで話を整理してなんとか納得した。

「にしてもそんな話、どうやって知ったんだ。わざわざこんな凝った話で俺たちを騙しても何の得にもなりはしないだろう」

ラウルの睨み付けるような視線がレイに向けられる。身に着けた軍服も相まってその眼差しには感情を殺した威圧感があった。

レイは答えることができなかった。なぜ知っているのかというより、なぜ彼らが知らないのかに疑問を覚えてしまった。ナツも生霊のことを知らなかった。自分がいつから生霊について知っていたのかはわからない。何かが抜け落ちたような感覚がひどく不安にさせた。

「とても現実とは思えないことばかりだしな。少しぐらい記憶がおかしくても仕方ないか」

ためらいがちに横目でナツを見る。

「その話が本当なら、時間がないところを引き留めてしまって悪かった。それでもよければだが、少しの間でもくつろいでくれ」

「それ私が言うことじゃない？」

アンナがからかうように言うとならうはそのまま俯いて黙ってしまう。今ではかえ

って浮世離れして見える光景にレイの口元も無意識に綻んでいた。

「でもその話、私も知っているわ」

アンナの告白に全員が一斉に視線を集中させる。

「知っていると言っても本で読んだことがあるだけだけれど、昔読んだ本と同じ話  
が。私たちの間に伝わる民話みたいなものだったと思うけれど」

アンナが覚えている話は、レイが知る生霊の話とほぼ一致していた。

生霊は霊長として進化した種を観察し彼らの文明や生態を記録する。これ以上の進化がないと判断すれば霊長として君臨していた種を滅ぼし、次代の霊長となる種へと生霊自身が生まれ変わる。その繰り返しによって地球を管理しながら生態系の発展という目的を果たす。生霊に感情はなく、生まれた時から与えられていた使命を愚直に遂行する存在。生霊たちがどのようにして生まれるかは彼ら自身も認識できていない。

話に食い違いはなかった。もしかしたら、自分もその話を読んだことがあったのかもしれない。結局レイがわかったのはそんなぼうぼうく茫漠なものでしかなかった。

レイは風に当たってくると言い訳をつけて一人夜の暗闇に紛れた。帰路がわからなくなならない程度に離れた樹海の中で、誰もいないはずの空に呼びかける。

「見ているなら出てきてくれないか」

呼びかけるにはぶしつけ不躰な言い方だった。声に呼応してどこからともなく小さな光の球がふわふわと近づいて周囲を仄かに照らす。

「今はそのままの姿なんだな」

「こちらの方が便利なのよ」

生霊は強弱なく言う。素直に姿を現すとは考えていなかったためレイは動揺していた。

「生霊は何も食べないのか」

探るようにどうでもいい疑問を呈する。

「私たちにとっての食事は人間のタバコみたいなものよ。味はわかるけど、それ以上のものでもない。むしろ依存症状が出ればたちが悪いだけ」

他愛もない問いかけにも目の前の光は律儀に返答した。レイはそのことを知っていたが、それ故にこの生霊が誠意をもって話を聞いているのだとわかる。

「何の用」

「確認しておきたかったんだ。あの二人をどうするのか」

「心配しなくても、こんなところで人と交わらずにいる人間をむやみに消すつもりはない。観察対象として他の生霊に教えはするかもしれないけど」

安堵の息をつくレイの姿を生霊はじっと眺めている。

「あんたたちは、自分たちの存在を人に認知されていいのか。人から記憶だけを消すこともできるんだろう？」

生霊は人間の記憶を蒐集するために人から記憶だけを奪うこともできる。ただしその対象は、不用意な支障をきたさないため、死を間近に控えた者に限られている。

「掃除を始める前は明確に決まっていなかったけれど、どの道最後には全員消えるのだから捨て置いても問題ないという考えで一致したわ。もっとも、あなたのような輩に吹き込まれない限りは生霊の仕業なんて思いもしないでしょうけど」

そう説明した後どこか投げやりに言う。

「その結果どうなるかなんてことは皆目知り得ないことだけれど」

「……生霊でも知らないことがあるんだな」

レイの疑問に対し、生霊は苦笑交じりに当然だと返した。

「生霊は万能じゃない。動くのは鳥よりも遅いし、意思の疎通は人のように直接対面しなければならない。テレパシーのようなことはできるけど、人にはその代わり以上になる通信機器を生み出した。案外そんなものよ。私たちのできることもなんて、元々は記憶の蒐集と生物の消去、あとは新しい種に生まれ変わって発展を繰り返すことだけ」

「十分だいそれたことに思えるけど。少なくとも人間よりも劣っているとは思えな

い]

光から自虐的な笑みがもれる。

「どこからともなく生まれて、生まれた時から与えられた使命を疑いもなく従順に実行する。疑問を抱くこともなくただ無感情に。そんなことをしていても虚しいだけだと、近頃考えてしまうことがあるわ」

思わず言葉を窮した。彼女の口調は感情がないというにはあまりに情緒豊かで、悲壮に満ちて聞こえた。

「だったら、何のために……」

「それが知りたいからこんなことをやめられないのかもしれない」

生霊は現れた時と同じように宙をゆっくりと漂って消えた。

レイは今更ながら不思議に思う。自分の街を消した憎むべきはずの生霊に、どうしてこれほど気を許してしまっているのだろうか。

帰路について間もなく、様子を見に来たラウルに声をかけられる。

「誰かいたのか？」

首を振ると怪訝に目を細めるが、それ以上追及されることはなかった。

「俺みたいな堅物があると話し辛いからって、あんたの様子見てくるついでに追い出されたよ。女同士の方が気楽だろうし、俺の家でもないから逆らう義理もないけどな」

台詞とは裏腹に満更でもなさそうに頭を掻く。

「あんたは随分信用されているんだな。あの娘に話を聞いていたら、あんたがどうしたただの、たまにムカツクだの、楽しげにあんたのことを話していたよ」

「偶然会って一緒に旅をしているからですよ。俺だからってわけでもないと思いますけど」

「俺だってここにいるのは偶然だ。そんなことを言い出したら切りがない」

「そういえば、二人はいつからここに？」

ラウルは足を止めて近くの樹木に背中をあずける。時間つぶしには丁度いいかと言いつつ、顔を閉じて思い出すように記憶を語った。

「あの人は元からだ。俺は……戦争から逃げ出してきた」

そう切り出すと無表情に取り繕っていた仮面が壊れ、途端に沈痛な面持ちに変わる。

「俺のいた国では民族間の差別が根強く残っていてな。俺の部族はいわゆる使う立場の側だったが、アンナの方はまったく逆の人間だった。周りがそうしていたように、当然のように、他の部族の連中を自分より劣っていると思い込んでいたんだ」

無造作に放り出された手が、何かを掴もうとするように拳をつくる。

「戦争には否応なく巻き込まれた。見ての通り俺は軍人だ。軍では戦地に赴くよりも指揮する立場にいた。兵士として戦わせたのは国内でも肩身が狭い部族の人間ばかりで、俺もそのことに何の疑問も持っていなかった」

夜の熱気を帯びた風が頬を殴りつける。

「何人無駄死にさせたかわからない。そのうちに戦況は悪くなって、親しかった奴らも次々に死んで、両親も病にふ臥して。何のために闘っているのかわからなくなったところに自分も戦場に駆り出されることになった」

自然に口調に熱がこもり、拳には腕に血管が浮き出るほどの力が込められる。その拳は怯えるようにぶるぶると震えていた。

「散々命令しておいて、自分のことになると突然恐くなったんだ。生きていた理由もわからなくなったのに死ぬのが無性に恐くて逃げ出した。抱えられるだけの食糧を持って、国境を越えて、誰もいない場所まで逃げた」

——そしたら、逃げた臆病者だけが生き残った。ラウルは演技じみた素振りで腕をだらりと広げる。

「しばらくして恐る恐る戻ってみたら何もなくなっていた。頭の中が空っぽになってさまよっていたところをアンナに拾われた」

彼女は元々街には馴染めず、故郷恋しさで祖父母が建てたあの家に身を寄せていた

という。祖父母が亡くなった今は彼女が一人で住んでいた。

「あの人は恨んでもおかしくない軍人の俺に、何のためらいもなく親切にしてくれた。俺も恩返しやら罪滅ぼしやら生きるためやら、そういういろんなものひっくるめて彼女を手伝った」

目を開けたラウルは空を仰ぎ、こらえきれずに嘲笑をもらした。

「皮肉なことに、国も、金も、権力もなくなると、自分が抱いていた差別意識がどれほど子供じみたことだったかを実感させられる。安っぽい小説のような話だが、それだけくだらないことだったんだと思うよ。人間に未来がないと思われるのも、無理もないことかもしれない」

長々と何言ってんだろうな、と話の腰を折ったが、レイの耳には聞こえていなかった。にわかに浮かび上がった疑問が、波のように押し寄せて口を開かせた。

「なら、今の自分たちは何のために生きているんだ」

レイ自身、その言葉が自分自身のものだ気づくのにには時間がかかった。無味乾燥に綴られた言葉は感情の損なわれた虚しい響きを残す。

「そうだな、俺はやっぱり恩返しとかそんなもんだろうな」

首をひねりながら、ラウルは絞り出すように答える。だがその後続く言葉には、青年の偽りのない確たる意志があった。

「これも皮肉な話だが、今の方がよっぽど生きている実感がある」

きぜん毅然に振る舞っていた青年は、肩から力が抜け落ちるようにしかん弛緩した顔つきになる。屈託のない青年のあり方にレイは憧憬に近い感情を抱いた。

「あんたはどうなんだ。何かやり残したこととかないのか」

「今はナツの旅が終わるまで付き合っただけで精一杯で」

ラウルは神妙に腕を組み、何かを言いあぐねるように頭を掻きむしる。

「それも十分なことだとは思っけど、その後はどうするんだ」

「後？」

ラウルは目を伏せてためらいがちに言う。

「言い辛いが、あの娘には時間がないんだろ。旅を終えて一人になった後はどうするんだ？ 正直目的の一つも持たず生きるには、今の世界は酷だと思うが」

初めて会った時から理解していたはずの事実が、レイの胸に鋭い刃を突き立てた。ひどく冷淡に聞こえたのは、ラウルの言葉が核心を突いていたからだろう。

レイは手のひらを見つめてしばらく考えたが、答えは出なかった。だからこそ出し抜けるに途方もない疑問を口にしたのかもしれない。

「無理に生きようとする必要すらないのかもしれないけどな」

その言葉を最後に、二人はそれ以上の会話を交わすことはなかった。

レイとラウルが戻った後も、眠れないナツに配慮して彼らは夜通し談笑に付き合ってくれた。レイは少しでも休むように勧められて床に就いたが、眠ることはできなかった。

旅の目的を果たすことができるのか。

それ以前に、ナツの故郷がまだ存在するのか。

旅が終わった後、自分は何のために生きるのか。

レイの脳裏で、道行く先に待つ海が拒絶するように巨大な波をたてる。脳裏に染みついて離れない何もかもが、引いては押し寄せる波の音となって耳の中でこだまし続けた。

その晩、レイは旅の始まりを思い出していた。

日常が一瞬で終わりを迎えた。嘆くことも惜しむことも呼吸さえする暇もなく。

昼夜絶えることのなかった人の声が突然やんだ。気づいた時には目の前から彼のいた街と人が消えていた。爆発したのでも倒壊したのでもなく、ただ消えていた。

眼前の光景が灰色の荒野に変貌した。鉄のそれとは違う、人間にどうしようもない絶望を与える世界だった。コンクリートのない乾いた地面には人が傷つけたと言わんばかりの割れ目や歪みが散見され、その隙間から底の見えない闇の入り口をのぞかせていた。

辺りに人間の気配は感じられない。見つけたのは、かつてコンクリートの隙間で懸命に芽を出していた名も知れない草ぐらいのものだった。

景色とともに心まで乾いたレイは、揺らぐ意識をやつとのもので保ったが、足はしばらく杭になったかのように動きを止めた。しばらくしてようやく足を進めたが、両手をだらりと下げたまま、足だけが放心したようにさまよっているだけだった。

何時間か歩いたところで、依然荒涼とした景色に突如・光が現れた。その光は比喻でもなんでもなく、本当にただの光だった。光を放つ粒子が集まり、手のひらほどの球体を成している。光の球体は一面にいくつも存在している。動くわけでも形を変えるわけでもない。眠るように球体たちは地面の少し上を浮いた状態で静止している。不意に理解した。世界から人の作り出したものだけが消えている原因が何であるかを。それが生霊という存在であるということ。

消される、恐怖に駆られ光から逃げるように足をあげた。だがその足取りはゾンビのように遅く、ほとんど動いてはいなかった。生きるために本能的に逃げ出したものの、そもそも生きていても目的を見出せなかった。

——どうして、自分は生き残ってしまったのだろう。

二、三日が過ぎ、抜け殻のようになったレイの前に一つの変化が現れた。

人だった。少なくとも遠目にはそれは人の影に見えた。吹きさらしの荒野で座り込んでいる小さな人影だ。

自分以外に人がいる。今度こそようやく不確かな希望を見出したレイは瞳に光を宿し、重りを外したように軽くなった足取りで走り寄った。

「ダレ……？」

少女のかすれた声が一文字ずつゆっくりと鼓膜を震わせ、レイは思わず息をのむ。俯いた少女の体は普通ではなかった。頭は半分包帯で覆われているが、そんなことは些細な問題だった。

少女は環元に見舞われていた。まだそれほど進行していないとはいえ、身体の一部が無数の粒子となっている。頭部がわずかに環元している影響で、喋り方もたどたどしい。

不意に気づいた。五体満足に意識を取り戻した自分は、とてつもなく運がよかったのだと。

「あんた、何かやりたいことはあるか」

生きて意味もわからない自分には、自分よりも運が悪かった人間の手助けぐらいしかできない。そう思ったレイは問いかけた。

「……カエリ……タイ」

## 0

その酒場は周囲に並ぶごうしゃ豪華なバーとは違い、やや古めかしい趣を漂わせている。訪れる客は世間と上手く折り合いをつけることができなかつた者や、とても裕福とはいえない層が大半を占めている。いくつか並ぶテーブルの一角に作業服を着た一団が集まっている。近頃少年の姿の生霊にとっても見慣れたレイという少年やその同僚たちが、仕事の疲れを癒すために次々に酒瓶を空にしていく。

生霊に食事は不要であり、酒なども当然縁のないものだ。生霊が酒場にやってきたのは、先日自分が何気なくもらした人間じみた発想の答えを知るためだ。

「相席していいか」

「ん？ おう、飲め飲め」

酔いつぶれていた一団に混ざるのは容易だった。レイという少年をはじめ、皆顔を赤く染めながらも嬉々として飲み続ける。手に持ったジョッキをぶつけあい各々気ままに喉に運ぶ。生霊はこれまでも、そして今も別段興味を示したことのない飲料水を始めて口にする。

——ただの苦みがある水だった。当然アルコールで酔うはずのない生霊は顔色一つ変えず、騒々しい人間たちを冷静に観察し続けていた。

枝にとまる小鳥のさえずりが夜明けを知らせる。木々の屋根から朝日がもれ出し、ようやく視界の見通しがつくようになった。朝の清々しさが残る中、名残を惜しむ間もなくレイとナツは旅路についた。最後まで裏表なく親身になってくれた二人は今もレイたちが見えなくなるまで見送ってくれている。

身に纏った布を締め直し、終わりの見えない旅を再開する。だがレイの脳裏には今でも昨晚の会話が焼き付いている。

「ナツにとって、海の向こうの世界に行くことはそんなにも大切なことだったのか？ 友達や家族を置いてきてまで来る必要があるほどに」

「ワタシノ、シマ、ウミノソト、デルコト、キンシ、シテタ」

海の外に出れば災いがふりかかる、彼女の島ではそんな言い伝えがあったという。単に子供を脅かすための作り話が都市伝説のように広まったのかもしれないが、時代錯誤なしんげん箴言はある意味で的を射ていた。だがその言い伝えがナツを突き動かす原動力になったというなら皮肉な話だ。

「それだけで危険を冒してまで海を渡ろうと思えるものか？」

ナツはしばらく間を置いてどう説明するべきか模索した。

「キノウ、アンナサンガ、セイレイノ、ハナシタ」

ナツが持ち出したのは、少し前まで笑顔で手を振っていてくれたアンナが昨晚語った民話だった。その話には、生霊についての記述が事実とほとんど食い違いなく記されていたという。意図を理解しかねるレイは眉間にしわを寄せる。

「それが何か関係あるのか」

「アノハナシ、ワタシノ、シマニモ、アッタ。スコシダケ、チガッタ、ケド」

思わぬ告白にレイが声を上げる。ナツは引きずるように足を進めながらも懸命に話し続ける。

「ダカラ、ウミニ、デタ」

我知らず首を傾げる。話を聞いていたはずが、本を何十ページも読み飛ばしてしまったような齟齬をきたす。

「じゃあ、海の外に出たかったのは生霊に会いたかったからって言うのか」

思わず笑い混じりの口調で聞き返したことにへそを曲げたナツは、レイが平謝りし続けた数分間口を利かなかつた。

「シラナイ、コト、ドウシテモ、メニ、シタカッタ。ヒトニハ、ダケ、デモ、ワタシニハ、シカ、ダカラ」

理解したような態度をとったが、胸中では上手く納得できていなかった。漠然としていて、砂のようにざらつく感触が残る。

「でも帰りたいっていうのは、やっぱり家族や友達に会いたいからか」

「ソレモ、アル。デモ、ソレヨリ、バカニシタ、ヒトタチニ、カエツテ、ジマン、スルタメ」

レイは呆れたような、それでいて安心したような苦笑を滲ませる。少女の屈託のない言葉は、レイの抱える悩みが意外にたいしたものではないと思わせてくれた。

「デモ、イマハ……」

ナツは布の隙間から双眸だけをのぞかせてレイを見上げる。レイが視線に気づくと何事もなく正面に向き直った。

たどたどしくも二人が会話を弾ませることができたのはこれが最期のことだった。

森を出て再び開けた草原を歩き続けた。だが緑の絨毯がかかった大地は、徐々に暗色のかかった土が面積を広げ、その色も次第に灰色を帯びるようになる。以前まで街の中で生き延びていた草木がようやく芽を出していた。ここ数日はもともと自然の多い地域を歩いていたが、人間がより手を伸ばした地域になるほど、視界に飛び込んでくる風景は次第に色を失っていく。頬を打ち付ける風はひどく乾いたものに感じられた。

何日もそんな景観を目にし続けると、他の人間はすでに一人も存在しないのではと疑ってしまう。数日前に森で出会った二人と過ごした一晩も、今ではそんな思考がもたらした幻だったように思える。

数日間何度も同じ感想を抱くだけの日々を繰り返し、盲目的に歩き続けた。まだ消されていない街も、生き残った人間も目にすることはない。唯一目にしたのは、うつ伏せに倒れた人の姿だった。人といえども見た目から判断できるのは男だったということぐらいだ。頬がこけ、破れた服の隙間からは浮き出た骨がさらされている。えんさ怨嗟の叫びを上げているように口を開き、すがるように伸ばされた腕を目にして、まだ生きてると判断する者はいないだろう。腐りかけた男の肉に虫たちがたかっている。

「……カワ……イ……ソウ」

ナツの喋り方は以前よりも要領を得なくなっていた。隠れた肌は着実に環元が進行し、体の半分近くがその状態にあった。ナツは歩く速さだけは緩めないが、それでもレイが手を引くようになっていた。

レイは顔いて群がる虫を払い、自分が羽織っていた布を死体にかぶせてその場を立ち去った。元々ナツにあわせて身に着けていただけのもので、なくなって不自由することもない。

男はおそらく、ラウルと同じように街を離れていたところを偶然に生き残ったのだろう。彼との決定的な違いは、何かを求めたその手を掴む者は誰もいなかったということだ。男の無残な姿は、日増しにいんうつ陰鬱になる二人にとって意識せざるを得ないものだった。

太陽が以前より茹だるような熱を放つかと思えば、突然の雷雨にさらされることもしばしばあった。雨の中でも二人は歩き続けた。天候以外では季節感なんてまるで感じさせないまま、季節は春から夏へと移り変わろうとしていた。

連日の雨が上がり、雲の隙間からまた太陽が望めるようになる。

表情のない沈黙に浸り、気力を摩耗させるだけの日々が続く中、ほとんど止まることなく歩き続けた二人の足がブレーキをかけたように止まる。

視界にいくつもの光が飛び込んできた。変わらない景色が流れていたことでレイの意識は足元ぐらいにしかいなくなっていた。そのせいで気づくのが遅れてしまっていたが、茫漠な更地の至る所に、手で掴めてしまいそうな大きさの光の球が浮かんでいる。一定の間隔をとって陣を描くように浮かぶのはまさしく生霊という存在だ。その様はレイのいた街が消えた時と同じだった。

「この辺りも消えたようね」

少女の声で眩き、気配もなく現れたのはこれまでに二度姿を見せたあの生霊だ。本来の光の粒子が集まったような姿ではなく、亜麻色の髪の下に活発な印象を与える海色の瞳を持った少女の姿をしている。

「今日はその恰好なのか」

「あなたはこっちの方がいいと言っていなかったかしら」

感情を持たないはずの生霊が、一切表情を崩さないまま軽口を叩くためにその真意はまったく窺い知れない。首を傾げながらこちらを見るナツをごまかすために咳払いをし、何の用だと言わんばかりの視線を生霊に向ける。

「一応近づかないよう警告に。生霊たちはただそこに浮かんでいるだけだから」

そんなことはわかっている、と鼻を鳴らす。危害を加える気がないとわかっているも、目の前の少女が故郷を消した張本人であることに変わりはない。

「じゃあここには、少し前まではまだ人が……」

少女が静かに首肯する。

生霊が陣をとるよう浮かんでいるのは、そこにあった人や街が消えた証だった。多くの生霊が自分の担当する区域に散らばり、定刻になれば掃除を始める。生霊たちの光の粒子が一面に漂い、あらゆる物質が環元を起こす。ナツのように運や意志といった要素に恵まれた者だけを残し、地上にあった何もかもが大地に還り、姿を消す。そこには最初から何もなかったかのように。

「この辺りは辺境と言っても差支えないから。戦争にも関与していなかったようだし、地球への害も少なく優先順位は低かった」

生霊の目的は生物の進化とその土壌となる地球の管理だ。その後者の面からかんが鑑

みて掃除の優先順位が決められる。巨大な国家なら当然環境へ及ぼす影響も大きい。レイがまだナツの故郷が残っていると信じて旅を続けられるのもその理由によるところが大きい。田舎の、それも離れ小島ならまだ時間は残されていてもおかしくはない。

「セイ……レイ……サン……ナンデ……イツ……シヨ……ケサ……ナイ」

「生霊にも限界はあるわ。一つの都市を掃除するには何百何千の生霊がいても相当な時間と準備が必要なの。一つずつ消そうと思えばこうやって一瞬だけれど」

腕を元の粒子の姿に戻し、地面に転がる石にめがけて振るう。石はたちまち実体をなくし、生霊の腕と同じ粒子に変わった。

「直接手を下せば、環元なんて起こす間もなく一瞬で消える。こうすれば人だけでなく、生霊が生霊を消すことだって可能よ。そんな手段では国一つ消すにも手間がかかり過ぎる」

途切れ途切れのナツの言葉に、少女の姿の生霊は懇切丁寧に応じた。

「彼らはまだ掃除を終えたばかりで情報の整理に時間がかかる」

環元によって発生した粒子には、記憶やその場所に残された記録が残留している。たった今、目の前で消えた石にもその土地の記録が残っている。生霊たちはその粒子から人間のこれまでの歴史を蒐集するが、膨大な情報を整理するにはやはり膨大な時間がかかる。そのため人のいなくなった大地にはしばらくの間、情報の整理で動かない生霊たちがそのまま浮かんでいる。

「その状態でも、人が触れようものならその人間は容赦なく消されるから変な気は起こさない方がいい」

言われなくても、とレイが不快感を露わにした声で言う。そのやり取りを隣のナツがクスクスと小さな笑い声をもらして見ていた。

「感情というものはよくわからない。笑っている場合じゃないだろうに」

生霊がぼそりともらす。

「独り善がりな価値観で一喜一憂して、そんなものがあるから争いを起こすし自分を見失う」

「でも争いがなければ人間が発展することだってなかったんじゃないか」

「ええ。その事実を反省して生霊は、いつかはそうしなくても発展できる生物に進化しようとしている。しようとしているといっても、あくまで生まれ変わってみなければわからない。人間の知識や記録を蓄積するのは、あくまでより高度な文明を生むための確率を上げるだけの行為でしかない」

「争わず、感情も持たず。そんなこと無理じゃないのか」

吐き捨てるようなレイの言葉に生霊はそうね、とあっさり認めた。

「他のことは案外なんとかなってきた。人間の前の霊長がこれほど発展した機械の文明を築くことはできなかったけれど、人間にはできた。結局は根比べなのよ」

それでも、そう言って生霊はお手上げだというように肩をすくめる。

「生きるため。人間でなくてもほとんどすべての動物は争ってきた。その事実を顧みて、感情を持った人間が生まれた。けれど結局その人間でさえいつまでも争っていた。その理由にはいつまでも主観的な価値観があり、今度は感情のせいで争いが生まれている。何をやっても堂々巡りにしかならないような気もするわ。それでも生霊は生まれた時からそうすることしか知らないのだから仕方のないことかもしれない」

「なんか、悲しいな」

生霊という存在に対する怒りや憎しみも関係なく、口を突いて出た。

「あなたを見ていると心からそう思うわ」

その言葉を皮肉だと言わんばかりに少女は微笑をたた湛える。そんな表情の生霊にレイは眉をひそめる。

もう一つ、と言葉の意図がわからず困惑するレイを一瞥して付け加える。

「生霊が感情に過敏になるのは他にも理由があるの」

動きを止めた生霊たちに向き直り、その光景を注視するように目を細める。亜麻色の髪の間に見え隠れする眼差しに静かな熱が込められていた。

「生霊が他人の記憶を奪えるのは知っていたはずね」



レイは洪々といった表情で頷く。

「今のように入類そのものを掃除する前にも、生霊は人の記憶を奪い、蒐集していた。なるべく影響が出ないよう、病に臥したり死が近かったりした人間を選んで」生霊たちは遥か昔から無作為に選んだ人の姿を模して人に潜み、その歴史を記録していた。住人が数十人しかいない街や隔絶されたような孤島でも例外はない。ただし今のように入規模な掃除が行われている時には、散らばった生霊が局所的に集まっている。

「そのうちの一人、とても小さな孤島にいた生霊に異変が起きた。私たちは定期的に蒐集した情報を交換し合うため、大きく分けた区域ごとに集まることになっている。その生霊は私とは別の区域を担当していたから、聞いたのはだいぶ後のことだけれども、その生霊は集會に現れなかった」

人間で言えばただの遅刻で済む話だが、これまでそんな事態を経験したことのなかった生霊たちにとっては憂慮すべき事態だった。近くの島を担当していた生霊が問題の孤島に向かった。その生霊がどんな姿の人間を模しているのか孤島に向かった生霊は無論知っていたから、すぐに見つけることはできた。

「けれどその生霊はあろうことか、自分を人間だと言った」

湿っぽい風が頬を打つ。半ばいい加減に聞いていたレイが眉をひそめる。少女の姿の生霊はその反応を逐一確認するように目を配っていた。

「人違いということも、その生霊が姿を真似た対象の人間が生きていればあるかもしれない。けれどその男はとうの昔に死んでいた。搜索に向かった生霊は確認のため、その生霊に簡単な傷を負わせた。生霊なら傷口はすぐに治るし、血も一時的にそれを模したものが出るだけで、血痕はすぐに粒子に変わる」

予想通り傷はすぐに治り、地面に染みついたはずの血の跡も勝手に消えた。その男は間違いなく生霊だった。だが男は生霊という存在を認知していながら自分を生霊だと理解していなかった。

「その生霊に自身のことを自覚させるために搜索に向かった生霊は人間なら心臓がある部分を突き刺した。当然死ぬわけがない」

自身を人間だと思い込んでいた生霊は混乱した。

「そして男の姿をした生霊は、生霊が絶対に起こさないはずの行動を起こした」

——その生霊は、心臓を刺した生霊に反撃し、殺した。

人間や他の生物が生霊を殺すことは不可能だった。生霊を構成する粒子は物質を構成するよりも前の、環元に遭った状態に近い。人間は環元状態のものに干渉できず、兵器による破壊という概念も、すでに破壊されているような状態の生霊には通用しない。

しかし、生霊が生霊を殺す方法はある。それは生霊が人間や物質を消す方法と同じだ。環元のように触れただけでは意味はないが、生霊が意志をもって直接手を下せば、生霊も命を失い、殺された生霊の粒子は霧散する。

その生霊は自身を生霊と理解していなかったにもかかわらず、本能的に腕を粒子に変えて、自分を攻撃した生霊に反撃した。

生霊が生霊を殺すことは普通ありえなかった。そもそも同朋を殺すという行為自体、生霊たちは考えたこともなかった。考える必要もなく、そんなことをする意味はないと、常識として理解していたからだ。けれど生霊の常識は、人間の感情という要素によって根底から覆された。

「本来地球にとってワクチンのような役割をする生霊がバグに変貌してしまった。未曾有の事案に対して生霊たちは、男の姿をした生霊が自分を人間だと思い込んだのは人間の感情に深く浸透し過ぎたがためだと判断した。要するに、記憶を集めて感情についての理解を深めるうちにその生霊は自分を見失い、人間だと思い込むようになったと」

自分を人間だと思い込んだ生霊の顛末は語ることはなかったが、同族殺しを犯した生霊がどうなるのかは容易に推し量ることはできた。

気づくと、少女の視線がレイの顔に向けられていた。眉をひそめると生霊は静かに首を振る。

「長いこと引き留めてしまっておめんなさい。話はもう終わりよ」  
用事は済んだと言わんばかりに話を打ち切り、彼女、とナツに向いて言う。  
「時間をとらせてしまった私が言うのも申し訳ないけれど、そろそろ急いだ方がいい」  
その代わりにように生霊は最も安全だというルートを二人に教えた。今更その言葉を疑いはしなかったが、不信感は依然尾を引く。  
生霊は自身を少女の姿から、目の前に無数に浮かぶ光の球と同じものへ変える。  
「もう少しで海が見える。私は最後まで見届けさせてもらおうわ」  
レイはナツの手を握り直し、彼女の歩く速さに合わせて歩を進める。歩みは刻一刻と遅くなり、少女が笑った口元をのぞかせることも日増しになくなっていった。

## 0

少年の姿の生霊はいつも通り時計台から街をふかん俯瞰していた。戦っているわけではないが、次第に範囲を広げる戦争の経過を耳にするたび街は浮き足立っていた。

「もう酒場には行かないの」

少女の生霊はいつものように気配なく、少年の生霊の背に立っている。

「ああ。掃除の決行も近いしそろそろ潮時だ」

少年の生霊はあれから何度か酒場に行き、同じ一団に混ざって酒を飲んでいて。

「それで、何かわかった？」

「いや。彼らは毎日疲れを忘れるために酒の席を拠り所としていた。だが最近はただため息をついているだけだ。俺が酒場に行ったのは数回だけだが、その間に同僚が三人死んでいた。いずれも過労死だ。そんな恐怖の中で何のために生きているかなんてこと、余計にわからなくなっただけだった」

淡白に言う生霊の視線が工場の方角に吸い寄せられる。彼らは今日も沈痛な顔で労働を続けている。戦争の激化に伴い彼らの仕事も日ごとに増加していた。

「ただ、数回だけだったが、行かなくなるとそれで物足りなさも残るものだな」

生霊は自分の考えに揺らぎを覚える。今までに味わったことのないせきりよう寂寥とでも言うべき感覚だった。生霊は苦しみながらも笑顔で同僚と接するレイという少年の姿を見下ろした。

「酒でも飲みに行ってみるか」

少女の生霊が奇異の視線を投げる。まるで信じられないものを見るようだった。

少年の生霊はまったく冗談を言っているわけでもなく淡々と言った。目の前にいる同種の生物に、彼女は味わったことのない知的好奇心をくすぐられた。

## 4

張りつめた緊張が解け、手足から一気に力が抜ける。立ち尽くしたレイの靴に、足元の砂が流れ込んでくる。

目の前に海が広がった。陽光を反射した水面が形容しがたい色の輝きを放つ。限りなくどこまでも続く大海原は、この世界の変化さえ些細なものだと思わせる。波が音を立てて波紋を広げ、二人を飲み込まんとするばかりに脈打つ。レイとナツは潮の香りに包まれ、眼前の巨大な存在の前にしばらく茫然とした。これまで見たどんな景色よりも、その光景は記憶に深く浸透した。

ただ二人が茫然とするしかない理由は、なにも海に意識を奪われていたからだけではない。

「お前、こんなところどうやって渡ってきたんだよ」

「……………」

ため息を禁じ得ず思わず俯く。

当然わかっていた問題だった。けれどそれを口にしてしまえばナツは気力を失ってしまうかもしれない。それはつまり、首の皮一枚繋がっているナツの命が絶たれるということだ。その懸念がレイから考えるということを放棄させていた。だが海を目にし

た今、思わず口にせずにはいられなかった。

「海を渡るとか、無理だろ」

波が嘲笑うかのように足を濡らした。

ナツが海を越えられたのは言ってしまえば奇跡だ。舟を作るにしても、二人か三人乗るのが限界の舟——自作かつせいぜいボートのようなものでどれだけ距離があるかわからない海を越えるなんてことは普通無理だ。なにしろ当人が無理だったと白状しているくらいだ。ましてどこかの船に拾われる可能性は今のこの世界ではないに等しい。それ以前に、舟を造るのに必要な機材が一切ないのではどうしようもない。

出し抜けにナツが握った手を引っ張る。その視線は海ではない場所に向けられている。その先に目を凝らすと、あぐら胡座をかいている人影が見て取れた。がっしりとした体格から男だということはわかる。男は釣竿らしきものを海に垂らしている。今の世界には場違いな牧歌的な光景に見えた。かつては人に会えたこと自体に喜びを覚えていたが、問題が増えたいまではその喜びも霞んでしまっていた。

レイは藁でも掴むような気分でその人影に駆け寄る。姿を見て警戒させないようにナツはその場に待たせた。

声をかけると、海に意識を傾けていた男がやおら首を傾ける。容赦ない陽ざしをよけるための麦わら帽子をかぶる一方、全身を見ているだけで暑そうだと思わせる漆黒の神父服に身を包んだ姿はどうにもアンバランスだ。それに加え、口を覆うほどの髭と彫りの深い顔立ちは、神父というより屈強な兵士を連想させる。

「おや、見ない顔ですね。こんなところで初対面の人を見かけるとは珍しい」

中年は容姿に反したおうよう鷹揚な対応を見せた。その意外性にレイは思わず一瞬声を出すのを忘れてしまった。

「あなたは、この辺りの街から？」

「街というほど立派なものではないかもしれませんが」

ほとんど期待せずに問いかけたが、神父服の男は思わぬ反応を示した。まだこんなところにも、というよりはこんなところだからこそ人が残っていた。

あごひげ顎鬚をなでながら低いうなり声をもらす。突然何かを思いついたように目を見開き、レイの後ろに視線を向ける。

「あの娘は俺の連れで——」

「もしや、環元に？」

神父服の男の言葉に身を固くする。男は臆することなくただ微笑む。

「少し歩きますが、一緒に来てもらえますか」

神父服の男は山間を縫って進む。

人の喧噪とは言わないまでも、そこには活気があった。丸太でできた小さな家が並び、集落を覆うような森林と畑が広がる。そしてそれを利用する人々がいた。どこにも異常がないように見える神父服の男と比べると、人々は痩せこけ、とても健康な生活を送れているとは思えないが、反してその表情には曇り一つない。

住人の中にはナツと同じく身体の大部分が光の粒子となった姿の少女もいる。ナツとの違いは、光子になった腕や顔を一切隠していないということだ。当人も周囲の人々もその姿を意に介すこともなく、気さくに会話を弾ませている。

何気ない、けれど今となっては尊い景色だ。レイはその光景に見とれていた。

「世界のほとんどが機械の文明を得ても、故郷を手放せない人たちは意外にいたようですよ」

神父はレイとナツを家に招き入れた。テーブルと椅子だけで部屋のほとんどを占領してしまう程度の広さしかなく、樹海で一晩を過ごしたあの小屋に近いが、それよりもさらに一回り小さい。

「私の国も、目が覚めた時には生霊によって消されていた。私もあなたと同じく奇跡的に五体満足に生き残ることができたが、どうすればいいのかと途方にくれました」

その境遇は、写したかのようにレイのそれと酷似していた。

「国が消えるまでは、戦争の影響で暴徒化寸前の信者をなだめることぐらいしかできなかった。なので、せつかく生き残ったのだから最後くらい神父らしいことをしよう

と思ひましてね。十人不足ですが、いつのまにか人も集まってきました」  
この小さな集落は、神父がナツのような環元状態の人や、帰る場所をなくして放浪していた人々を集めてようやく再興したものだという。

「とはいっても、この集落自体は私たちが作りあげたものではないですがね。ここは生霊に消されずに残っていた場所でした」

「まだ生霊の手が及んでいない場所があったということですか」

「そうとも言えますが、少し事情が違いそうです」

神父の眉間に重々しさを湛えるしわが寄せられる。

「ここを訪れた時、ここの住人は皆殺されていました」

生霊の手にかかるまでもなく集落はすでに崩壊していた。住人のいなくなった集落は気づかれていないというよりも捨て置かれていただけなのだろう。

「そのおかげというのははばか憚られるが、私たちはこの場所のおかげで一命をとりとめることができた。いまのところは生活物資も残っているし、独占しようというつもりもありません」

どうでしょうか、そう言って神父の眼差しが二人に呼びかけるように向けられる。つまり、レイとナツもここに住まないかという誘いだった。

予想だにしなかった展開にレイの思考が止まった。ナツは頭にかぶった布から表情をのぞかせない。ナツはすでに隠しきれないほどの光を体中から放つようになっていた。海を越えることが絶望的なら、ナツに残された短い時間をせめて穏やかに過ごす方がいいはずだ。そう考えずにはいられなかった。

「俺たちはナツが故郷に帰るために旅をして来た。そのためには海を渡らなければならないけれど、その方法が見つからない」

「浜にある納屋には釣竿と一緒に小型のボートならあります。ですが海を漕いで行くにはいささか以上に厳しいかと。それに時間のことも……」

隣に座るナツに目を向ける。

「ナツはどうだ。ここなら姿を隠さなくても大丈夫だし」

「……………」

二人は言葉を失った。ここ数日ナツの口数は極端に減っていた。旅の目的を語っていた以前のかったつ闊達な少女の面影は見当たらない。

その沈黙を破ったのは、出し抜けに響いた玄関からの軋むような音だった。おおぎよう大仰に開かれた扉の前にいくつかの人影があった。

先頭の男はオールバックの髪と額の傷が特徴的で、一見してガラが悪いという印象を与える。対して一歩後ろに立つ女性は表所に乏しく、背中にまでかかる黒い髪も相まって大人びた静寂を纏っており、男とはまったく正反対だ。ただ共通することは、どちらも他の住人より肌色がよく健康そのものに見える。その点では、後ろにびくびく震えながら控える少年は住人たちと同じように痩せこけている。

「神父さんいるか？ さっきそこで死にそうな奴見つけてきたから捕まえてきたんだが、なんだ、先客がいたのか」

困惑した視線を投げるレイに神父は一言、考えておいてくださいとだけ言う。

「いや、丁度話も一区切りつきました。お二人は一度納屋に行かれますか」

レイは渋々頷き、ナツの手を取って席を空ける。

「帰ってきて早々悪いが、彼らを納屋まで案内してもらえるかな」

「穏やかな口ぶりで人遣いが荒いなあ」

へいへいと男はだらしなく両手を広げながら首を振る。レイとナツと入れ替わりにあとの二人が部屋に入り、さっきから震えている少年だけが座る。レイたちはあつけらんかんとして声をかける男に手招きされ神父の部屋を後にする。

不意にレイが振り返る。怯える男の後ろに控えた女性の視線がレイ、あるいはナツに向けられ、すぐに前へ向き直る。感情のないれいりり伶俐な瞳が、記憶の中の誰かを彷彿とさせた。

男に先導され、納屋のある浜辺に足を運んだ。集落から浜辺までの道程は、いつかの森に比べれば距離も険しさもたいしたことはなかったが、ナツの足取りに合わせ

て歩いたため移動には時間を要した。一人で樹海を歩いて行った陽気な少女の姿はもうない。

浜辺には食材を確保するために釣竿の前で辛抱強く構えている青年がいた。歳のほどはレイともそう変わらない。レイたちに気づくと満面の笑みで声を張り上げた。

「あんたら、新入りか？」

レイが言葉に窮していると、傷の男が代わりに保留と返答する。青年は見る見るうちに笑みを失い、悄然とした面持ちで釣りに戻った。

「気にしないでくれ。ここの住人たちはみんな、あんたが残るなら歓迎だって言いたいだけだ」

「……ああ」

海岸の一角に身長よりもやや高い立方体が設置されている。その納屋の中で、埃とともに放置されていた木製のボートは当然だがここしばらく使われた形跡はない。なんとか三人乗れるぐらいの大きさで、使うには修復が必要だ。どちらにしても、せいぜい海を漂って釣りでもするのが関の山の小舟には変わらない。ナツ曰く、自分の舟よりはよっぽどまともなことだ。ひきつった顔で苦笑するレイは、彼女がどれだけ幸運だったのかということに改めて思い知らされる。

「どうだい、使えそうか？」

「脆くなっている部分を直せばなんとか。脆くなくても元々無茶な話だけれど」

「違いねえ」

男は声を上げて笑う。最初に受けた印象とは正反対に飄々としている。

工具や廃材も山ほど残されていた。今日は船の修繕にかかれれば、明日の未明には出立することができる。

「そんなボートで海を越えるなんてあんたらも無茶なこと考えるよ」

言い返す言葉もなく苦笑しか出てこない。

「俺は戻るから、困ったことがあったら釣りに来た奴にでも聞いてくれ」

海岸から離れたところで男が声を張り上げる。踵を返し、集落への帰路につく足をにわかに止め、男はもう一度声を大にする。

「そういえばあんたら、どれぐらい旅をしてきたんだ？」

出し抜きの質問に思わず眉根を寄せるが、ことさら気にかけることもなく答えた。

「たぶん、一月ぐらい」

しばしの沈黙が流れる。男は二人のいる浜辺を見たまま石のように押し黙った。

「そうか、そいつは幸運だったな」

男の口元が三日月を描くように歪む。額の傷のせいなのか、その笑みには獣が小動物を狩るようなしげやく嗜虐的な感情を連想させた。

男はそれだけ言い残して再び踵を返して集落へ戻っていく。

「どうする」

ナツの返事はない。波の小さく満ち引きする音だけが停止した時間を動かす。

「とりあえず、このボートを直すか」

再び問いかけるがナツの反応はなかった。レイは手持無沙汰になった時間を紛らわすように作業に取り掛かった。

だが答えを先送りにしている時ほど時間は刹那に過ぎ去った。ふと海を見渡すと、一面の水面が茜色に染まる刻限になっていた。海を照らす夕陽が徐々に水平線に落ちていき、次第に夜の帳を下ろす。

あと少し、と修理も最終段階に移ろうとした時、その光景を見守っていたナツがぼつりと呟いた。

「モウ……イイ……ヨ」

久方ぶりに口にした言葉は、今までになく弱々しいものだった。

「タブン……ウミ……ワタ……ナイ。ダカ……ラ……タビ……モウ……オワ……ウ」

「……いいのか」

ナツが小さく頷く。レイはその答えをしばらく信じられなかった。心のどこかでナツは絶対にあきらめないと思い込んでいた。けれど目の前の少女にあるのは年相応のぜいじゃく脆弱さだった。

「俺に迷惑がかかるとか思ったからか」  
「チガ……ウ。モウ……ジュウ……ブン……ダカラ。ジュウ……ブン……タノ……シカ……タ……ラ」

レイも言葉の真偽を問いただしはしなかった。それ以上はどちらから声をかけることもなく時間だけが流れる。修理したボートが物寂しく浜に横たわっていた。全身の力が地面に吸収されるように抜けていく。拍子抜けするのと同時に安心していた。

目の前に崩れ落ちる少女はすでに喋ることもままならなくなっている。少女の身体は、頭と片腕、なんとか立っていらられるだけの足を残し、ほとんどが微細な光子の塊に姿を変えている。地面につく足がなくなれば立つこともできない。頭部の環元が進めば思考もより稚拙なものになる。そんな異変を表に出すまいとしてか、表に出す余裕すらなくなっているからなのか、ナツが自発的に話かけることもない。

——もう限界だった。

ボートを納屋にしまった後、二人が戻ることができたころには夕陽がすでに沈みきっていた。暗闇を映す海が一ヶ月余りの旅が終わったことを改めて意識させる。集落には住人たちがたき火を囲うように座って一堂に会している。レイたちを納屋まで案内した額に傷のある男が手招きして場所を取ってやったと言わんばかりに隣の地面を叩く。

「遅かったな、ボートはなんとかあったか」  
「案内してもらったところ悪いけど、残ることにしたんだ」  
「そうか……まあ懸命な判断だと思うぜ」

レイとナツも地べたに腰を下ろす。資源を節約するためにも食事の時や夜は可能な限り集団で行動するようにしているという。今日に限ってはそれだけということでもなかった。

「あんたらがそう言ってくれなかったら歓迎もあったもんじゃないから助かったぜ」

昼間連れて来られた少年は食事の席にいなかった。始終震えていた様子を見れば誰も不思議がることではなかった。

「そんじゃあ主役もそろったことだしとっとと飯にしようぜ」  
男の軽快な音頭に少ないながらも住人たちが賑わいを見せる。一匹をまるごと串刺しにして焼いた魚と手に収まるほどの樽を渡される。樽には酒の代わりに水が入っており、蒸留させてはいたが潮の香りがわずかに鼻をつく。

ナツは同じ境遇にあった女の子と話を弾ませていた。傍から見ればとても弾んでいるとは思えない喋る速さだが、先日まではほとんど口も利かなかったことを考えればやはり肩の荷が下りたということなのだろう。

「飲んでるか、つっても水だけだ」

なにかとレイたちの面倒を見てくれた額に傷のある男と、浜辺で釣りをしていた青年がレイの両隣に胡坐をかく。

「若い男が来てくれるのは大歓迎だよ。こちとら一番体力があるだろとか言われてなにかと押し付けられていたからな」

それがか、と先程の態度に合点がいく。

「実際体力があるんだからいいじゃねえか」

「それだけ健康そうでよく言うよ」

「俺は元々こんな感じだったんだよ、見ろ、新人がひいているだろうが」

「すまん、頼むから出ていかないでくれ」

青年はふざけ半分に頭を下げる。レイは森の家での二人の掛け合いを見ていた時のことを思い出す。どこか現実味がない、けれど決して不快ではない、むしろ懂れるような感覚だ。

手中の水面に映る自分の姿をぼんやりと眺めながらラウルの言葉を思い出す。旅が終わった今レイにはこれといった目的がなかった。

「ぼんやりしてどうしたよ」

焼き魚をそしゃく咀嚼しながら青年が横目で尋ねる。

「今まではナツを故郷に帰すって目的があったけど、それがなくなった今、どうしたいんだろうと思って」

「目的もなくなって何がしたいかわかんないってことか、でもみんなそんなもんだらう。俺は神父さんに拾ってもらってせっかく生き延びたんだ。今はその命を少しでも長くするので精一杯だよ」

ラウルとはまったく正反対の意見にまた黙考する。間髪入れず青年の言葉をけいちよう軽佻に否定する声上がる。

「わかってねえな。あんたが言いたいのは要するに生きる意味がわからないってことだろ。そいつは結構重要な話だぜ」

傷の男は、顔をしかめる青年とレイに講義を説くようにいいかと前振りを入れる。「生きる意味がわかってねえっていうのは、つまりまだ自分で自分の本質を理解してねえってことだよ。まあまだまだ若い誰かさんには早いかもしれないが」

威厳を見せるように顎鬚をなでながら言うが火に油だった。

「若いって、俺の方が少し年上だろ」

「だからわかってねえっていうんだよ」

いなしながら男がちらりとレイを一瞥し、にやりと口を曲げる。

「まあ生きる意味なんてものは案外単純なことなんだよ。要は自分の本音を聞く、それだけだ」

視線をまた水面に映る自分に向ける。

「とりあえず、こんなふうに騒がていられたら十分かもしれない」

つまねえな、と言葉通りに興味なく首を振る。それでもレイにとっては偽りのない本意に違いはなかった。

「そんじゃあととりあえず、新人の新しい人生に乾杯」

興味のない話を打ち切るような投げやりな物言いで樽をかかげる。レイと青年もやる気半分に樽を突き合わせる。

その瞬間、突としてレイの視界に光が差し込み、見覚えのない光景に切り変わる。今と同じように、誰かと酒樽を突き合わせていた。その景色は今の光景と重なった。

瞬きすると、目の前の景色はゆらゆら形を変えるたき火に戻る。陽炎のごとく現れた記憶はとりとめのない情景となって頭の中に霧散した。

集落の中心で燃えていたたき火が消え、住人たちは自分の家に引き返していった。レイとナツも余っていた家を借りている。

ナツを家に置いたレイは改めて神父にその旨を伝えに向かった。ここでは誰が決めたわけでもなく神父は町長のように思われており、本人もその役を買って出ている。神父は机上の蠟燭に火を灯し、両手を組んで瞑想するように双眸を閉ざしていた。

「残ることにしたそうですね。私たちにとってもあなたのような若い方は大歓迎だ」青年が言っていたように、釣りをするにも畑を耕すにも労力が必要だ。増え過ぎれば食糧がまかなえなくなる危険もあるが、この世界でその心配はないに等しかった。

「ナツはあとどれだけ保つかかわからないけれど、共々これからよろしく願います」

頭を垂れるレイに神父は人当たりのいい温厚なえびす顔を浮かべる。あの後レイは青年や他の住人からそれぞれの来歴を聞かされていたが、その際に誰もが彼に感謝する言葉を残していた。それだけこの神父服の男は人を安心させるような雰囲気を持っていた。

「少しいいですか」

神父は自分の前の椅子に座るよう促す。

「君は生霊のことを知っていたんだね」

「人間を滅ぼして、これまで得た知識を糧にして新しい種に生まれ変わる存在」

「ああ。各地に記録される民話に明記されている通り、彼らは地球の管理と発展を使命として生きている。私たちはそのことを理解していた。けれど、この集落の者たちを含めた私が出会った人々はそのことを誰一人として知らなかった」

君を除いて。両手の指を組み合わせ、含みのある声で言う。

「君と私の共通点は生霊の掃除に巻き込まれたにもかかわらず、環元されるでもなく生き延びたことだ。それはきっと天文学的確率で起きたことだろうし、生霊についての知識を持っていたことも無縁ではないだろう。私はそのことが、どうしてもただの偶然とは思えない、生きていることには何か意味がある気がしてならない」

神父の瞳がどこともない宙を視る。

「ずっと以前から、私は自分が生きている意味を模索していたように思うことがある。その結果が聖職者だとすれば、陳腐な話だが意味も見出せたのかもしれないが、君にもそういう感覚はないかな」

彼の言葉にあるのは、ただの純粋な好奇心だ。その好奇心の答えはレイにとっても、満ち引きする波のように掴みかけては離れていったものだ。

「似たような感覚はあった」

胸の内に散らばったちぐはぐな感覚を一つずつ掴み言葉に変える。

「ナツと旅をしていていろんなものを見てきた。こんな世界でも生き甲斐を見つけ懸命に生きている人がいる。俺の生きる理由は、そんな人たちようになって誰かにこのことを教えるためなのかもしれない」

言い終えてから自分の歯の浮くような台詞を思い返し、思わず耳を赤くする。神父は十字架をあつらえた漆黒の服に違わない暖かい眼差しでその様子を見守っていた。

「十分な理由だと思いますよ」

照れくささで視線をそらしてしまうが、決して不快な感覚ではなかった。

わずかな静寂が流れる。

机上の蠟燭が火に耐えかねて蠟を落とす。その直後、にわかに静寂が破られた。

玄関の扉がいまにも壊れそうな軋みを上げていんいん殷々に開け放たれる。二人は椅子から跳ね上がり音の方に向き直る。

扉を開けたのは、昼間この集落に連れてこられた少年だ。少年は扉の前を動かない。ただ肩を小刻みに上下させ、その動きとともにしきりに荒々しい息を吐き出す。洩れ出る声だけでわかるほどに呼吸が乱れている。元々顔色が悪く怯えているように映っていたが、今の状態は明らかにそれとは違う異常さがまとわりついていた。

「……騙されない……俺がやるんだ……」

少年はぼそぼそと要領の得ない独り言を繰り返した。強迫観念に駆られるように怯える姿は薬物中毒者に似ている。どうしたものかと目を見合わせ、神父が声をかけようと近づいた瞬間——少年は内の恐怖があふれ出したような奇声を上げて手前のレイを無視し、神父に詰め寄った。その手には、隠していたナイフが相手を突き刺すように力強く握られている。

神父は屈強な容貌に反することのない洗練された動きで体を傾けて切っ先をかわす。だが突然の襲撃だったために完全にかわすことはできず、刃が袖を切り裂き、かすった腕から鮮血が糸のようにこぼれる。神父はわずかに顔をしかめるが、出血に物怖じすることなく態勢を崩した少年の手首を掴み、そのまま腕ごと背中に回して身動きを封じる。

「俺は騙されない！俺は消されないぞ！」

少年はなおも意味不明な独り言を叫びながらばたばたと身体を動かして抵抗を続ける。神父がため息交じりに首根へ手刀を放つと、短い呻きとともに力を失い、神父の腕に寄りかかるようにして倒れる。

なんのことはないという笑みでレイを安心させ、死体のように力なくぶら下がる体を椅子に座らせる。

「たぶん混乱していたんでしょう。こんな状況では疑心暗鬼になっては魔がさすのも無理はない」

神父は憐れむように意識を失った体に目を据える。同様に視線を向けるレイの脳裏には、少年の放った「消されないぞ」という発言が尾を引いていた。彼が怯えているのはまるで——。

少年が気を失い室内は輪をかけて静かになったが、反面物音に反応した住人たちが騒ぎを聞きつけてせわしない声が聞こえるようになる。



「いま表を出ると面倒でしょうから、奥の部屋の裏口から出てください」

外の音が次第に静まると今度は扉をノックする音が後を続ける。神父はこくりと顔を早く出ていくように目で訴えかける。指示通りレイは移動しようとしたが、途端に足を石のように固め、さっきまで争いが繰り広げられていた床を注視した。

——血の跡が、ない。

小声で早く、と促す声が思考を遮る。足音を消して早々に裏口の戸に手をかける。レイが扉を開けると同時に表の扉も開かれた。

「騒がしくしてすまない。昼間君たちが連れてきた少年が錯乱していたようだ」

「……………」

神父の言葉に返る声はない。扉の閉まる音が沈黙に緊張を付加する。

音を立てて吹く夜風が木々を揺らす。闇に響く葉擦れの音が根拠のない不安を煽る。レイは戸を開け放ったまま足音を消して引き返す。部屋を隔てる壁に背をあずけて無意識に姿を隠し、首をひねり、なんとか神父のいる室内の様子を窺う。

来客は、さっきまで錯乱していた少年を連れてきた二人だ。昼間会った時と変わらず、額に傷のある男は悪戯が上手くいったようにほくそ笑み、反対に黒髪の女は諦観して一切に興味を示していないようだ。だが二人は依然押し黙ったまま、室内の様子を注意深くへいげい睥睨している。蠟燭の小さな明かりが俄然心許なく感じる。

「やはり間違いないな」

「今更確認するまでもなかったけどな」

女の声はおよそ人間味を欠いた冷気を帯びている。何を言っているのか飲み込めずに困惑する神父に、女は淡々と言葉を紡ぐ。

「戻る意思があるなら、すぐにここを出ろ」

「……何を言っている」

神父が怖々と言葉をかける。女は逡巡を見せたかと思うと、神父の言葉を無視して足元に転がったままのナイフを拾い上げる。

「血は、・・もうないか」

女は確かめるように刃を指でなぞったかと思うと、その切っ先を無造作に神父の腕にめがけて投げつけた。錯乱した人間のずさん杜撰な動きとはわけが違った。そもそも人間業とは思えない速さだった。黒ずんだ体液が床に飛散する。神父はほとんど反応できず鮮血があふれる腕を抱えて膝を落とす。

「なに……を……」

「その腕をよく見てみる」

レイからは背中越しにしか見えないが、神父が恐怖するように肩を揺らし、何かを目にして絶句する様子が背中越しにも伝わる。

レイは無意識に、何かを確認するように視線を神父が崩れ落ちた床に移す。その刹那、思わず声をもらしてしまいそうになる。

床に飛散した血が、やはり消えていた。そして、血だまりがあったはずの床に残されているのは、宙を漂う・光・の・粒子だった。頭の中で、咄嗟に点と点が結びつくような感覚を覚えるが、馬鹿な思いつきだと一蹴し、何かをごまかすように耳を澄ませた。

「あんたは前から違和感を持っていたみたいだからな、どういうことかわかるだろ」

男が愉快そうに言う。神父は絞り出すように声を出す。痛みを悶えてというよりは、残酷な真実を知ることが恐れているようだ

「お前たちは……」

「説明するよりも見せる方が早いだろう」

女がどこまでも無感情に言ったのを合図に、二人が自分の腕を眼前にかざす。

二人の腕がその実体を失い、光の粒子に変化した。

その光景は、少女の姿の生霊がやってみせたものと重なる。

傷の男が神父の横を通り過ぎ、その後ろで気を失った少年に近づく。そして光に変化した腕をそのまま振り下ろした。

目をしばたたくが眼前に広がる現実是不変な。気を失った青年の姿が瞬きする間に消え、人の形を象った光の粒子が残された。粒子は霧散し、視認できないほどの

大きくなって消えた。

生霊、今度は抑えることができずに呟いてしまうが、同時に神父も声を発したこと  
でなんとか聞こえなかったようだ。

「こちらは前例のように消されるつもりはないのでな。理解したのなら今一度問う。  
ここを出るか、いますぐこの人間諸共に消されるか」

レイは我知らずはやがね早鐘を打つ胸を握りしめ、細心の注意を払って足音を消し  
て裏口に戻る。開け放ったままの扉をくぐる。足が地面に着くとすかさず走り出  
した。

「残念だよ、・・・同朋」

背中越しに男の冷酷な声が突き刺さる。

消される。レイは焦燥を抑えきれずに全力で駆け抜けた。騒ぎを聞きつけて外に出て  
いた住人の声を無視し、ナツのいる借家まで一直線に走る。

——君と私の共通点は——神父の言葉がよみがえる。一連の会話が導き出す結論から  
逃げるようにレイは走った。

「いますぐここを出ろ！」

部屋の隅に縮こまっていたナツを説明もそこそこに引っ張り、走り出そうとする。  
だが今のナツがレイの速さで歩くのは不可能だった。レイは洗面を浮かべながらナツ  
の手を取り、彼女の歩調で辛抱強く歩き続けた。

たいした距離ではないがどっと疲労感が押し寄せる。生霊に気づかれる前になん  
とか浜辺までは逃げる事ができた。振り返るが跡を追う影はない。できるだけ距離  
を稼いでおくべきだと判断したレイは他の住人への罪悪感を押し殺し、ナツの手を再  
度握る。歩き出そうとしたその時、ナツの足が崩れ落ちた。

「ゴ……メン」

布をよけると、すでに左足がつま先まで粒子化していた。光は足の形を成している  
が、石化したように動かなくなっている。ナツはもうまともに歩くこともできない。  
布地の下はほとんどが人間であった証拠をなくし、光に包まれている。二重の恐怖が  
レイの焦りを駆り立てる。

「ボートで逃げよう。すぐに持ってくるからここで待ってろ」

ナツを近く岩陰にもたれさせ、砂を蹴りあげて納屋に走る。

納屋の暗闇の中を手さぐりに物色し、なんとか見つけたボートを引っ張り出す。

「大変そうだな。俺も手伝おうか」

息がとまるような戦慄。

背後から微笑混じりの声が聞こえる。飄々とした言い回しの男の声には聞き覚えがあ  
った。髪のかからない額に特徴的な傷を刻んだ男、人間に成りすましていた生霊だ。

「急にどうしたんだよ、残るんじゃないのか」

口元に怪しげな笑みを浮かべた生霊は何事もなかったかのように言う。辺りに女の  
姿の生霊は見当たらず、一人で来たようだった。

「ああ、やっぱり後悔したくないから行くことにしたんだ」

「にしても、一言ぐらい声をかけてくれてもいいと思うけどな」

「時間がなかったから、それに、神父さんには言ったよ」

予想外の事態に思わず歯切れも悪くなる。

どう考えても早すぎた。生霊が小規模な集落を消すのはそう時間がかかることでは  
ないが、にしても限度がある。もう一人に任せてきたのかもしれないが対象に一人や  
二人の取り逃がしがいたとしても、生霊がそれほど過敏になって追いかけてくるこ  
とはないはずだった。それにもかかわらずこの生霊は、二人が集落を出て間もなわざ  
わ追ってきた。

「どうしてこんなところにいるんだ、そう言いたそうだな」

口元は弧を描いたままだが、獲物をねめつけるように鋭い双眸は決してレイから離  
れない。

「……なんのことだ」

レイがしらを切ると、生霊は思い過ごしをしたというふうに関を掻きむしる。

「なんだ、俺はてっきりあんたが盗み聞きしていたと思ったんだが」

気づかれていた。レイは作り笑いでお茶を濁すが、目の前の生霊は気にも留めない。

残された可能性は二つ。一つはこの生霊が二人をそのまま放置する可能性にかけることだが、こんなところまで追ってきた以上それは希望的観測ですらない。助かるには、この状況を仲裁してくれる誰かが現れるのを期待するしかない。集落をすぐに消すと言っていた以上、この生霊がレイを消さない理由はない。だが以前からレイとナツを観察対象にしていたというあの生霊——少女の姿で二人の前に度々現れたあの生霊が仲裁してくれたのならまだ助かる見込みはあるのかもしれない。

だが少女の姿の生霊は一向に現れる気配を見せない。

「まあいいや。そろそろこっちも本題に入るとするか」

依然軽薄に喋る生霊が腰にさしていた何かを出し抜けに掴む。

——えっ？

握られていたのは拳銃だった。そう認識した瞬間には、耳をつんざく轟音とともに引き金が引かれていた。レイの左胸から黒い体液が吹き出し、身体はそのまま仰向けに倒れた。

何が起きているのか理解できなかった。理解した時には激痛が全身を走り、言葉にならない慟哭を上げる。

——なぜ拳銃が、なぜ撃たれたのか、なぜ生霊が銃を撃つのか。頭の中で溢れかえる疑問がかくはん攪拌される。だが思考する間もなく視界は暗闇に閉ざされ、意識がそのまま深い奈落に落ち——

「おい、とつとと目を覚ませよ」

男の声に閉じかけた瞳が痙攣し、再び意識が覚醒する。

全身を侵食していた痛みが消えていた。倒れた身体を起こすことも造作もない。

左胸に手を当てる。吹き出した血液はなかった。服にも身体があった砂浜にも血の跡は残されていない。唯一手のひらに残されたのは、微細な光の粒子だった。

「やっぱりたまねえぜその表情！ その何が起きているか全然わからないって間抜け面ア何度見ても飽きねえよ！」

男は顔のあらゆるパーツを恍惚に歪ませて喝采を上げる。啞然となるレイを他所に生霊は一人腹を抱えて音にすらならない笑いをこらえている。

「悪いな、つい楽しくなっちゃってよ。まさか一日に二人も同類を見つけるとは思わなかったぜ」

まったく理解が追い付かないレイを置いて生霊は話を進める。

「まあ一つずつ説明してやるよ。まず俺は生霊だ、この通りな」

神父にやってみせた様に腕を元の姿に変え、すぐに人間のそれに戻す。

「あんま驚かねえな。やっぱり聞いてたのか」

「……もう一人は、どうしたんだ」

「ああ、あいつか。邪魔だったから殺した」

あまりに簡単に口にしたために、そうでなくともその言葉の意味を理解することができなかった。

「生霊が生霊を殺すなんてあるわけがない、生まれながらに与えられた使命に従順で懲りずに進化なんか目指している生霊がそんなことをするはずがない、か？ まあ普通ならそうだが、俺は普通じゃないからな」

生霊が生霊を殺すことは普通ありえない。少女の生霊は確かにそう言った。同時に普通ではない生霊がいたということも。

「俺はさあ、生霊として盲目に人間を観察しているうちに気づいちゃったんだよ。快樂も苦痛もなく、誰から与えられたのかもわからない使命とやらに従うことがどれだけつまらないかってことに。自分がまるで人間みたいな考えを持っていることに」

涙でも流しているかのように顔を覆う。その一挙一動には空々しさが帯びている。

「そんな人間の感情を持っている俺に転機が訪れた。俺が観察していた集落——それがあの集落なんだが——で一人の殺人鬼がいたんだよ。そいつはネジが一本外れたやつでな、快樂殺人ってやつを楽しんでいた。だが運の悪いことにそいつは人間の姿の

俺に手を出してきてな。まあ邪魔だったから消してやったよ。するとだ、そいつの記憶を蒐集するうちに俺までおかしくなってきたよ、そいつがやろうとしていた殺戮を無意識に引き継いでたんだ」

男の声やみ、苦悶に歪んでいた表情が硬直する。

「そうしたらよ、自分の中の常識があっけなく崩れていった。今までに感じたことのない充実感を得られたんだ！ 人間が酒に酔うみたい、もっと血が欲しいって騒ぎだしたんだよ！ 感情なんてないはずの生霊の俺がだぜ？ こっけい滑稽な話だろ？」

硬直を破り、顔全体が異形の化け物のように歪む。目や口がそれぞれ意志を持っているかのように統一性のない動きを見せる。

人格こそ違えど、その姿は自分を人間だと思い込んでいた生霊の話と重なる。

「こんなに楽しいことをやめられるわけがなく、気づいたら全員殺してたよ。でもそのころには、世界のほとんどじゃあもう人間はいないんだぜ、そりゃあ悲しくて涙まで流したよ。もうこの渴きを潤せないかと思うと全身を引き裂いてやりたくなった」

演説をするように腕を広げていた男が空を仰いだまま動きを止める。途端に何かを悟ったように。

「考えたんだよ、人間がいねえなら生霊を殺せばいいってよ」

右目が空を見たまま左目だけがレイに固定される。獲物を逃がすまいとする猛獣のそれだ。

「でもただの感情のない生霊を殺しても、少し驚くだけでリアクションに乏しくてよ。俺が欲しいのは人間のように情緒豊かに嘆き苦しむ姿だったのに」

「……狂ってる」

男がにやりと口を捻じ曲げ、嘲笑するように音にならない笑いを上げる。

「ああ狂ってるよ、でも狂ってるのは俺だけじゃない。お前も、あの神父も、同様に、いやそれ以上に狂った者同士じゃねえか」

レイが沈黙する。狂気に満ちた男の言葉を理解できないからではなく、理解してしまうことを拒んでいるから。

「じゃあ現実を認めたがらない若者に一つクイズでわかりやすく理解させてやるよ」

悦楽に浸る男は司会者気取りに言う。

「これからするのはお前自身に関する簡単な問題だ。第一問。なぜ人間のレイ君はろくに食料も得られない状況下で一ヶ月も生き残ることができたのでしょうか」

「……」

押し黙るレイに男は拳銃を構え、容赦なく発砲する。銃弾が貫通した腹部から暗紅色の液体があふれ出す。男はレイが痛み悶える様子を眺め、抑えていた愉悦の笑みを惜しみなく発露する。

「残念時間切れだ、簡単な問題なんだからとっとと答えようぜ。じゃあ第二問、人間のレイ君はどうして拳銃で撃たれているのに平気でクイズを聞いているのでしょうか」

数秒を待たずしてけたたましい銃声が暗闇に響く。あふれ出した血液は間もなく色をなくし、光を放つ微細な粒子となって消える。一瞬だけ遠くなる意識の中で男の虫の鳴き声のような笑いが聞こえる。

「じゃあ第三問、普通の人間のレイ君はどうして生霊のことなんて情報を知っているのでしょうか」

——止める。無言で唱えるレイに数秒たらずして弾丸が撃ち込まれる。男は飽きることなく嬉々として笑う。幾度となく同じ光景を見続けたレイから次第に痛みという感覚が薄れていく。

「そろそろ反応もつまらなくなってきたし最終問題といくか。最後はサービスで二択の問題だ。ここにいるレイ君の正体はなんでしょう。一番、人間。二番——」

「……生霊」

「正解だ。やればできるじゃねえか」

男は満足げに手を叩く。

「正解は、あんたも俺と同じ、それ以上に狂った生霊だったことだ。まあその様子だ

とさっきあの神父が怪我したところを見ておおよそ察していたようだが」

男の言葉を否定できる根拠などレイには何一つない。それよりも、ほつれた糸がようやくほどけたような爽快感さえある。

冷笑がひとりでもれ出す。生霊に怒りを見せておきながら自身がその相手だったというのだから自分を嘲笑わずにはいられない。

「生霊が人間の思考や感情に毒されて、生きる理由なんてそれこそ人間臭いことを考えるようになる。そんな俺たちのような奴らは生霊としての使命を見失った愚か者とみなされている。いわばバグってとこだ。接触して本来の意志を取り戻したならそれでよし、戻る様子がないなら消せっていうのが俺たちに対する生霊の総意だ」

だが、苦虫を噛み潰すように言った男は足元の砂を踏みしめる。

「本来の意志？ 最初からプログラミングされたように生きている生霊のどこに意志なんてあったんだ？ 俺はこんな自分を他の生霊より愚かだと思ったことはない。むしろ優れていると断言できるね。進化だか知らねえが、自分の意識を失って、それで生まれ変わってなんになる」

男が砂を蹴りあげる。やり場のない怒りをぶつける様は人間にしか見えない。

「地球の歯車に成り下がっている奴らよりも、曲がりなりにも自分の意志を持った存在の方がよっぽど優れているさ。むしろ俺たちこそ理想的な存在じゃねえか。生霊が生まれ変わるのには、使命に従順なだけの生霊じゃあ進化も発展もできないからだ。なら俺たちには他の奴らができない理想的な進化だってできるはずじゃないか！」

夜空に放った叫びが静まった海にこだまする。だが抑えきれない怒りを訴えるように両手を広げた男の表情が一転して冷めたものになった。男は空を仰いだまま、瞳だけをレイの方に動かす。口元は再び恍惚に歪んでいた。

「まあ実際そんなことはどうでもいいさ。俺としてはこのまがい物の感情を満たせばそれで問題ないからな。だから俺はあんたやあの神父を尊敬してるんだぜ。あんたらは自分を生霊と忘れるほどの強い感情を持って俺よりも情緒豊かに生きている。痛みなんか感じるはずもないのに、先入観で痛いと思いついて血まで吐き出せるんだからたいしたもんだ。あんたらは生霊の空虚さをより理解してる」

男の表情にしげやく嗜虐的な笑みが戻る。

「それに感謝もしてるんだぜ。あんたのような存在がなければ、俺はこんな快感をもう得られなくなるところだった。あの神父なんざ、わざわざ残しておいた集落に人間まで集めてくれたからな。感謝してもし足りねえよ」

嫌悪を露わにするレイの表情を待っていたと言わんばかりに舌なめずりする。

「でも今のうちに気づかせてもらってよかったじゃねえか。人間と生霊が共存してればいつかはボロが出る。そんな無理な夢からは今のうちに覚ましておくべきだぜ。でなきゃあの神父みたいに何を言われるか」

「……まだ、生きているのか」

わずかに見せた動揺に男が歯を光らせる。

「ああ、正確には生かしている、だが。おもしろそうだったから、住人の前で神父の正体を明かしてやったんだよ。みんな口広げて沈黙してよ。どういうことか説明しろって騒いでいたよ。実に楽しませてくれるぜ。今頃は魔女狩りにでもあってるか、もしかしたらあいつが住人全部消してるかもな。そういや俺が消したあのガキ、あれも俺が仕込んだいたんだぜ」

狂喜する様はもはや、人間の皮をかぶった悪魔だった。

「でも皮肉だよな。人助けを生き甲斐とした奴や、人間の輪の中で生活できればいいなんてお人好しに限って、自分が人間を消していた張本人だってことを覚えてないんだからよ。けど一番皮肉なのは、あんたが大切にしていた嬢ちゃんがあんな身体になったのはあんたのせいでもあるってことか」

憐れむような視線を向ける一方で口元は不気味に歪んでいる。

核心を突いた言葉にレイ——という少年の姿を模した生霊——の身体から力が抜け落ちる。神父の前で言った言葉を思い出し、あまりの滑稽さに肩を震わせる。記憶をなくして目覚めたレイはすぐにナツを見つけることができた。その事実は、レイがナツを今の姿に追いやった何よりの証拠だ。そんな現実には、少年のような心を持った生霊

を絶望させるには十分だった。

「そろそろ潮時か。前例と同じ轍を踏むのは俺もごめんでな。まだ生霊のように動けないみたいだし、さくっと殺させてもらおうぜ」

崩れ落ちたレイの前に立ち、男の腕が無数の粒子に変わる。

「楽しませてくれてありがとよ」

光を振り下ろそうとしたその時、男の頬に小石が飛来する。投げつけられるというより辛うじて届いた程度の勢いだ。

二人の生霊の意識が向けられる。一人は青ざめた顔で凍り付き、もう一人は新しい玩具を見つけた子供のように喜んだ。

「そーいや、もう一人いたんだったな」

ナツはうつ伏せのまま身体を引きずっていた。布に覆いかぶさった小さな身体がゆっくりと近づいてきていた。唯一まともに動く片腕を引き寄せ、身体を数センチずつ前に進める。石を投げられたことさえ奇跡に思える痛々しい光景だった。

「こりゃあもう少し楽しめそうだ」

男はレイの元を離れて矛先をナツに向ける。立ち上がろうとするレイを銃弾で押さえつけ、そのままナツの身体を一切の躊躇なく蹴り上げた。少女のわいく矮躯が悲鳴もなく投げ出され、身体を覆う布が外れる。弾みで頭を覆っていた包帯もほどける。蹴り上げられたからというよりも、包帯に覆われた部分は、環元によってすでに元の形を留めていなかったからだ。

包帯に覆われていないナツの顔をまともに目にしたのは初めてだった。亜麻色の髪は耳に少しかかる程度の長さで、瞳に海のような青を宿した活発な印象を受ける少女。初めて見たにもかかわらず、見慣れていた。

「んだよ、もう消えかけてやがる」

まともにわかる特徴は髪や瞳の色ぐらいだった。右肩から首に繋がるわずかなラインと包帯の巻かれた頭部の半分を残して、ナツの身体はすべて光を放つ微細な粒子の塊に変わっている。残っている部位ですら今もなお環元が進行し、まともに原型を保っていないかった。

「せっかくだ、ここで一思いに消してやるよ」

駆け寄ろうとするレイにさらなる銃弾が撃ち込まれ、ほとんど反射的に膝を折る。本来は感じるはずのない痛みだと理解しているつもりでも、身体が痛みを覚えるべき状況だと錯覚していた。

やめろ、そう叫ぼうとした声が虚空に消える。うずくまったまま手を伸ばすレイの横を静かに通り過ぎる影がいた。どこから現れたのか、いつからいたのか。亜麻色の短い髪を揺らす少女は目の前に横たわるナツによく似ている。

少女の腕が質量をなくし、光を放出する粒子に変わる。男が足音に気づいて振り向くが、その時にはすでに少女の腕だった部分が振り下ろされ、粒子が男の身体を覆った。悲鳴も怨嗟の声を発する暇もなかった。自身が実際に人を無数の粒子に変えてみせた時のように、男の身体が同様に散開する。宙に漂う粒子は一つの集合体になることもなく地面に落ち、砂に混ざって消えた。

「最後まで見届ける、それだけのつもりだったのに」

少女の姿をした生霊は、嘲りを含んだ微笑を浮かべた。

## 0

辺りには何もない荒涼とした世界が広がる。風景には似合わず空だけはつつがな恙無い晴天だ。人の喧噪や仰々しい街並みは跡形もなく消え、その一点に光の球体がぼつりと浮かんでいる。大陸に存在する国家の掃除を終えた生霊たちは、すでに情報の蒐集を終えて同朋の元へ集合している。かつて少女の姿をしていた生霊も同様に決められた場所へ移動した。生霊は不意に自分と同じ区域を担当していた生霊について思案を巡らす。しばしば生霊らしからぬ発言を見せ、酒の席にまで誘うような妙な生霊だった。

酒の味も雰囲気も生霊にとっては特筆すべき点はなく、とうの昔に観察済みの光景となら変わりなかった。だがあの生霊は違った。酒を味わうでもまさか酔うわけで

もない。彼が酒場で見せたのは、騒々しい人間たちに対する慈愛の眼差しだった。

だから驚くことはなかった。集まるはずだった生霊のうち、何体か行方知れずになっていることにも、彼を見つけた時、生霊としてではなく人間として生きていたことも。

生霊はかつてと同じ亜麻色の髪の少女を真似た姿となり、自分を人間だと思い込んでいた彼の観察を始めた。

少女の姿の生霊は初めて与えられた使命以外の意志を持って行動した。

## 5

夜の暗闇を映した海に、静かにたゆたう波間を一そう艘のボートが浮かんでいる。

レイが前、少女の姿の生霊が後ろでオールをまわしている。二人の間にはじっと動きを止めて座るナツがいる。ナツの身体は再び布で覆われている。

「聞いてもいいか」

漕ぎ続けたままレイが問う。返る声はないが、了承していると勝手に受け取る。

「俺やあの男は、この前話してくれた生霊と同類ということなのか」

「ええ。生霊が人間の感情に深く干渉し続けた結果生じたのがあなたたちのような存在。知識として生霊のことを覚えているけれど、自分のこととは露程も思っていない。以前話したようにそういう生霊はわずかにいた。各地に生霊に関する民話が残っているのもそのため」

人間だけで生霊の存在を解明することは不可能だ。そう考えれば、必然的にレイのような生霊の存在に帰着する。

「今も行われ続けている人類の大規模な掃除は、人間の感情が刻まれた記憶を一挙に集めることになる。だから最近では、あなたのような存在があとを絶たない」

「要するに、あんたは監視だったってことか」

否定の声は聞こえない。男が先程話した通り、元に戻るようならそれでよし、そうでないなら消せ。神父の部屋にいた女の姿の生霊は実際にそれを実行しようとしていた。

「だったら、どうして助けたりしたんだ」

これだけの情報を聞いて、レイはいまだ自分が生霊だった時の記憶を思い出してはいない。男同様に、この場で消されてもなんら不思議ではない。

「私とあなたは、同じ区域を担当していたの」

意表を突かれて言葉を失う。

「まだ人も街も残っていたころ、生霊として私とあなたは同じ区域の観察、及び掃除にあたっていた。そのころからあなたは人間じみたことをよく言っていた」

少女は昔を懐かしむように微笑する。

「酒の席にまで付き合わされた。飲み食いする必要のない生霊同士でよ？」

滑稽でしょ、そう言うと生霊は思わず恥じらい混じりにかすかな声をもらす。前を向いたままのレイが何事かと首だけを後ろに向ける。

「おかげで、私も十分に狂ってしまった」

仮面のように達観した生霊の顔に綻びが生じていた。そうごう相好を崩す少女の姿は見た目相応のあどけなさと諦観を感じさせた。

「私は今の状況を必然だと思っている。人間も生霊が生まれ変わって誕生したのだから、生霊に感情という要素が一切存在しないなんてことはないはずよ」

話している少女と二人の間に横たわるナツを見比べる。ナツはまた姿を隠しているが、二人の少女の姿は鏡で映したように同じだった。生霊は人間の姿を模す場合は誰か一人の人間をベースにする。後ろでオールをまわす生霊には、それがナツだったというだけのことだった。レイと名乗る生霊にとっても、レイという少年の姿が偶然強い印象を与えただけの話だった。だが傷の男を真似た生霊がそうであったように、感情を持った生霊が見出した生きる意味は少なからずベースにした人間の影響を受けていた。

「確かに感情は危険だった。さっきのように生霊が生霊を消していれば、これ以上の進化なんてないのかもしれない」

「……………」

「私からも一つ聞いていい？」

レイも反応を示さなかったが、少女の生霊も気にせず言葉を紡ぐ。

「どうして集落に戻らなかったの」

「あいつが言っていた通り、自分を生霊だと知っていながらまた性懲りもなく混ざるのは、やっぱりできそうにない」

集落の混乱はすでに治まっている。ナツの姿の生霊が住人ら、それに神父服の生霊の記憶の一部始終を奪ったからだ。人間の脳、すなわち頭に触れることで記憶を奪うことができる。生霊も人間の姿をしている場合、その中核は頭部に存在する。生霊が生霊を殺すことができるのだから、人間相手と同様に記憶を奪うことも可能だ。当然そんなことをする生霊は普通なら存在しない。それをできるのは、男と同じく狂った生霊だけだ。

波の音も、鳥の鳴く声もしない静寂。今は眠りにについている海も、次期に夜が明けて目を覚ます。

「それに、どうせ時間がないのなら最後まで旅を続けようって。ナツも頷いてくれた」

ナツはまともに喋ることも動くことさえもできずボートに横たわっている。

「あと、どれくらいなんだろうな」

「もって夜明けまででしょうね」

無情な言葉が突き刺さる。だがナツ本人はすでに自覚していた。すでに異例といってもいいほど長く生き永らえていたが、やはり限界は訪れていた。

「少し話せるか、聞いているだけでもいいから」

背中へのナツに声をかける。ナツは声を絞り出して、うんと言う。生霊は静かに瞼を閉ざしてボートを漕ぐことに集中した。

「こんなこと訊くのも変かもしれないけど、ナツは旅ができて少しは楽しかったか？ 俺は、もちろんいつもじゃないけど、たぶん楽しかった」

「ウ……………」

「ならよかった。俺、この旅で一つだけ気づいたことがあるんだ。自分の生きている意味。神父にそのことを聞かれた時は誰かのためとか偉そうなことを言ったけど、本当は違った。俺はただ周りに人がいる誰かを羨んでいた。騒ぎ合ったり助け合ったりしている姿に焦がれていた」

——生霊の自分は、そんな自分にはないものを持った人間に憧れた。ならたとえ生霊として愚かな存在であったとしても、感情を持って人のように旅をできたことに後悔はない。その点では奇しくも嗜虐趣味の生霊と意見が一致した。

「だから俺は、またナツみたいな友人を見つけようと思う。残った街に溶け込むのは無理でも、お前みたいに一人残されている誰かがいるかもしれない。そんな誰かとまた旅をできれば、俺にも生きている意味はあるんだと思う」

視界が少しずつ明るくなっている。東の空は刻一刻と白んでゆく。

「いつか言ってたよな。他人には『ダケ』のことで、自分には『シカ』だって。今ならその意味がわかる気がする」

「……………」

レイは言葉を探すが、鳥のさえずりが思考を乱す。

「えっと……そうだ、もし俺が好きとか言ったらお前は頷いてたか」

「……ナ……イ」

「それもそうだ。さっき自分でも友達って言ったばかりなのに。性別のない生霊が何言ってるんだ」

「……………」

「そういえばお前は俺が人間じゃないって気づいてたのか」

「……………」

「いろいろ言いたいことがあったはずなのにな」

「……………」

「えっと、急に何話そうとしたのか忘れちゃった、なんでだろうな、えっと……」



「……………」

振り返らず持ち主を失った布きれに話し続けたが、次第に話しかける声もなくなり、嗚咽をこらえた呻きと光の粒子だけが虚空にとける。

何日、何十日と漕ぎ続けた。いまだ人間の姿から戻ることができないレイと違い、元の姿に戻って空へ浮遊することも可能な生霊もいまだにレイに付き合っていた。進路はそのままナツの故郷に向かっている。まだ街が残っているのだとしたら、後ろでオールを持った生霊がどうするのかを語ることはなかった。レイがそれを聞いたところで結果が変わるわけでもない。

「彼女は、満足していたのだと思う」

もういないナツの姿をした生霊が不意に言った。

「本当に人間みたいな慰めだな」

「事実だと思うわ。私はあなたよりも彼女のことを見てきた。だから彼女なら帰れなかった後悔よりも、あなたと旅をできたことに価値を見出していると思う」

「……あっ」

視界が小さな島をとらえた。本当にたどり着いたのだとある種の感動を覚える。

「俺一人たどり着いてもすることもないか」

ぼそりと独りごちるレイはこれからのことをぼんやりと思い浮かべた。街が消えているならナツのように俯いているかもしれない誰かを探す。そうでないならナツの生まれた場所を、それこそ生霊のように見物していればいい。ナツの友達とは話してみたいとも思ったが、すぐに思い直す。

「なら、また酒場にでも行く？」

「……それもいいかもな」

突然ボートが揺らぐ。何かと後ろを振り返った時にはナツの姿の生霊がレイの真後ろに立っていた。少女の小さな手がレイの頭に置かれる。

「えっ」

短い驚きとともにレイは意識を失った。同時に、レイがこの一ヶ月の間旅をした記憶は引きずり出されるようにレイから消えた。

生霊の中に、目の前で倒れている少年の姿をした生霊がレイとして過ごした記憶が、次々に流れ込んでくる。怒りも悲しみも喜びも、すべての感情が生霊にとっては眩しかった。

「あなたの友人の姿をしているからこそ、私もあなたを友人と思い込んでしまったのかもかもしれない」

生霊のことを友人という自分の存在そのものが、どこか皮肉めいたものに思えて苦笑いせずにはいられなかった、生霊は足元の布と包帯を拾い、島までの残りわずかの距離を一人で漕ぎ続けた。

「あなたのような生霊は、人間に混ざって暮らした方がお似合いよ」

生霊は自身がただの生霊だった日々と二人を観察してきた日々を思い出し、ふと虚しさが去来する。

いったい自分は何をしているのだろうか。与えられた使命に背いて、ただ酒を飲み交わした程度の相手のためにボートを漕いでいる。生霊がレイの記憶を奪ったのも、ただの好奇心ということもあったが、それ以上に勝手に友人と思い込んだ相手への情が湧いたからだった。

目の前に横たわるレイを見て生霊はため息をもらす。再び自分が生霊という記憶を失った——というよりも奪われた彼は、これからあの小さな島で人間として生きることになる。それはいつか、自分が人間でないことに直面したレイをまた苦しめるだけかもしれない。

ナツの姿をした生霊は、そのことがわかっていながらこの道を選ばずにはいられなかった。それはおそらく、生霊がナツのような自分の感情に素直に生きることと憧れてしまったからだろう。すべてを聞いてなおレイという少年として生きる彼も、同じだったのかもしれない。

なんて、愚かなんだろう。

そんなことを考えながら、少女の口は微笑混じりにひとりでのに呟いた。  
——こんなことは、するべきじゃなかった。

「じゃあ行ってくる」  
一面の田畑が広がる長閑な景色を一人の少年が走っている。夏休みも残りわずかになったその日、彼は友人と海へ行く約束をしていた。小さな島だから住民にとって海は珍しいものでもないが、最後の夏休みの記録として海に繰り出すことになった。

「レイ、おせーぞ」  
レイと呼ばれた少年の友人ら三人はすでに浜辺で待っていた。  
「悪い、でも先に海に入ってくれればよかったのに」  
「バカ野郎。金槌の俺を殺す気か」  
何しに来たんだよとレイを含めた三人が口をそろえる。  
「海っていうのは眺めてるだけでも十分楽しめるんだよ」  
「なにそれ、カイトは詩人にでもなったの？」  
隣の少女がからかい、レイたちもすかさず追撃を加える。カイトは威勢の割に撃たれ弱くうなだれる。  
「それにあれだ、今日はレイがこの島に流れ着いて丁度二ヶ月だしな」  
「取ってつけたみたいに俺を出汁にするなよ」

レイは今から二ヶ月前この浜辺に倒れていた。意識の戻ったレイにはここ数年の記憶が欠けていた。その時間だけがすっぽりと抜け落ちている。  
身寄りのないレイをある農家が快く引き取り学校にまで通わせてくれた。最初の一ヶ月は心ここにあらずといった具合だったが、次第に友人もでき、おかげで二ヶ月という時間で島に馴染むことができた。

二時間ほど各自持ってきた道具で遊んだ。昼になるとクジで負けた二人が食材を買出しに行き、レイとカイトだけが浜辺に胡坐をかいている。

「ありがとな」  
あまりにしおらしい突然の言葉にレイはおぞましさを感ずる。

「なんだよ急に、気持ち悪い」  
「素直に言ってんだよ。昔、ここを出ていった友達の話をしたことがあるだろ」  
ああ、とレイは思い出す。カイトらと同じ年の少女が自分で作った舟一つで海に繰り出したという話だ。この島は住民に島の外に出ることを固く禁じており、子供には島の外には何もないとさえ言われていた。けれどその少女は外の世界に夢を馳せ、そのまま一人で海に出たという信じられないような話だ。少女はそのまま帰ってきていない。

「大人たちはみんなあいつのことを馬鹿にしてた。でもお前がこの島に来て外の世界のことを聞かせてくれた時、あいつが信じていたものは間違ってたんだって証明してくれた」

力強く拳を握り、表情には高揚を露わにした。  
「その娘、どんな娘だったんだ」  
「負けず嫌いで無駄に元気な奴だった。俺とは喧嘩ばかりしてたけど、だからこそ友達だったんだと今なら思う」  
「なんとなく、わかる気がする」

潮風がやさしく頬をなでる。無限に広がるように思える海の景色にレイは見とれていた。何もかもをちっぽけに思わせてくれるその光景は落ち着きを与えてくれる。他にも理由があるように思えたがその答えが出ることはない。

空を仰ぐ視界の片隅に映ったものがレイの意識を奪う。浜辺から見える小高い崖の端にそれはあった。それが何かはわからないが、レイの瞳からそれが離れることはなかった。

「あそこの崖、どうやって行くかわかるか」

道順を聞いた矢先、崖に上る。先程レイが目を見失ったものは、おそらく墓だった。申し訳程度に盛り立てられた土に丸太で作った十字架がたてられている。名前が刻まれていないが、丸太には一緒に使い古された布きれと包帯が巻きつけられてい

た。

墓のある場所からは海が一望できた。ここを出た少女が外に憧れたという話を簡単に理解できてしまいそうなほど、そこからの景色は見るものを圧倒した。こんな海を一人で越えるのはまず無理だろうと、この島を出ていったという会ったことのないはずの少女につい呆れたような笑いを贈る。

海を眺めているといきなり強烈な風が頬を殴りつけてきた。風はすぐにやみ、また穏やかさを取り戻す。突風は、ここを出ていった少女がレイに笑われたことに対する怒りの表れだった。そんなお伽噺のような感覚を不思議と覚えた。

レイは改めて果てのない広大な海を見渡す。静かに凧いだ夏の海は、同時に少しだけ悲しみをたた湛えていた。

[戻る](#)